

加
茂
城
跡

加茂市指定史跡
か も じょう あと
加 茂 城 跡

—測量・確認調査報告書—

二〇一六

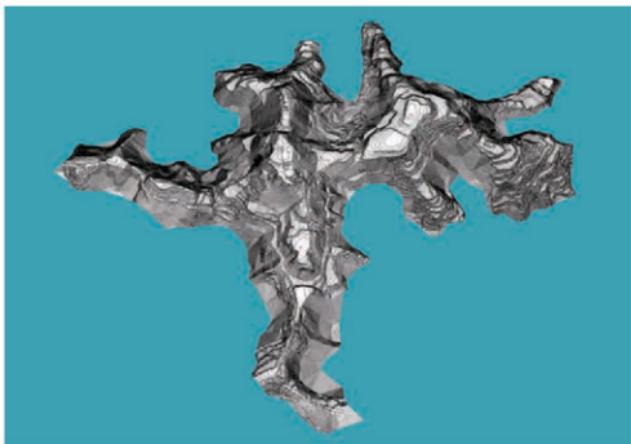
新潟県加茂市教育委員会

2016

新潟県加茂市教育委員会

加茂市指定史跡
加 茂 城 跡

— 測量・確認調査報告書 —



2016

新潟県加茂市教育委員会

序

加茂城跡は加茂市の市街地からほど近い加茂山公園に接して存在し、多くの市民の皆様からも自然を満喫し、健康増進のためのハイキングコースとして親しまれています。加茂城跡は名称のとおり加茂市を代表する史跡のひとつです。昭和 50 年には加茂市指定史跡として保存・活用が計られてきました。

加茂城跡は曲輪や堀切が約 37,000m² にわたって広がりを見せる市内最大規模の戦国時代の山城です。本丸付近からの眺望も素晴らしい城下を一望できます。

加茂市ではこうした評価に鑑みて、緊急雇用創出事業を活用して平成 24 年度に加茂城跡の詳細な地形測量と一部確認調査を実施しました。平成 27 年度にも追加調査を実施しました。本書はその調査の成果報告書です。随所に広い平坦面や大きな堀跡など戦国時代へ思いを馳せる数々の遺構が垣間見えます。

加茂城跡は加茂山公園や加茂駅から近いので是非多くの市内外の皆様から訪れて欲しいと思います。

このたび、本書を刊行することで、当地域の学術・研究資料として多くの皆様に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護思想が深まれば、この上なく幸せであります。

最後に、調査に対して様々なご指導とご協力を頂いた新潟県教育庁文化行政課、並びに調査に参加された作業員の方々、地権者および関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成 28 年 6 月

加茂市教育委員会

教育長 殖 栗 敏 夫

例　　言

- 1 本報告書は、平成 24 年度に緊急雇用創出事業で実施した加茂城跡の測量・確認調査と平成 27 年度に補足で実施した測量調査の記録である。
- 2 平成 24 年度実施の測量・確認調査の経費は新潟県補助金（緊急雇用創出事業臨時特例交付金）、平成 27 年度実施の測量作業、整理作業と平成 28 年度の報告書刊行にかかる経費は、文化庁からの国庫補助金交付を受けた。
- 3 調査は加茂市教育委員会が主体となり実施した。
- 4 調査記録図面・写真類は一括して加茂市教育委員会が保管している。
- 5 本書で示す方位はすべて真北である。
- 6 拝図に使用した既存図面については、その出典を記した。
- 7 写真図版 1 上段の空中写真は平成 10 年の馬越遺跡発掘調査に伴い撮影したもの、下段の空中写真是㈱オリスが平成 3 年 11 月に撮影した縮尺約 1/12,500 × 81.25% を使用した。写真図版 2・3 上段の空中写真是㈱イビソク新潟支店が、平成 27 年 11 月にマルチコプターで撮影したものを使用した。
- 8 引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載している。
- 9 本報告書の執筆と編集は、第 V 章については㈱パリノ・サーヴェイに試料を委託し、同社より原稿を頂いた。そのほかの執筆と編集はすべて伊藤秀和が行った。ただし、第 III 章 2 と第 IV 章 2 については、㈱イビソクの報告を基とし一部改変した。また、第 IV 章 3 の遺物のうち、1 については鳴海忠夫氏、4 については水澤幸一氏の原稿を基とし、一部加筆修正した。図版 19 の 1 の図は〔鳴海 2003〕からの転載、4 の図は水澤幸一氏が実測・トレースしたものに拡大を添えた。
- 10 遺物の写真撮影および石製品の実測はフォーカルに委託した。
- 11 拝図、写真図版の版組みおよび全体のデジタル編集・データ化は、㈲不二出版に委託した。
- 12 下記の地権者、地元の協力者の皆様から本事業に対して格別のご理解を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる次第である（敬称省略・五十音順）。
- 地権者　　青木茂男・阿部正明・五十嵐　徹・稻田芳實・井上恒治・白井立子・金子慎二
㈱エステートコンサルタント・耕泰寺・武内　豊・坪谷　勇・西村國一
本量寺・横山富男
- 協力者　　船久保幹夫（五番町区長）・廣円寺
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である（敬称省略・五十音順、機関などは順不同）。
- 池野芳男・小熊博史・金子拓男・高橋雅弘・滝沢規朗・立木宏明・鳴海忠夫・水澤幸一・横山勝栄
㈱イビソク新潟支店・加茂市税務課・加茂市水道局・加茂市文化財調査審議会・加茂農林高等学校
新潟県教育厅文化行政課

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 史料に見える加茂城跡	2
3 加茂城跡の既往の調査研究略史	4

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

1 加茂城跡の地理的環境	5
2 加茂城跡周辺の小字名と中世遺跡	5

第Ⅲ章 調査の概要

1 調査の概要	10
2 調査方法	10
A 平成 24 年度	10
B 平成 27 年度	12
3 調査の経過	12
4 調査の体制	14

第Ⅳ章 調査成果

1 測量調査	16
A 縄張りの概要	16
B 記述の方法と施設の分類	16
C 施設各説	16
1) 曲 輪	16
2) 堀 切	19
3) 通 路	20
4) そ の 他	20
2 確認調査	21
A 調査の概要	21
B 基本土層	21
C トレンチ各説	21
1) 1 トレンチ	21
2) 2 トレンチ	21
3) 3 トレンチ	21
4) 4 トレンチ	22
5) 5 トレンチ	22
3 遺 物	22
A 遺物の概要	22
B 遺物各説	22
1) 土器・陶磁器	22
2) 金 属 製 品	23
3) 石 製 品	23

第V章 自然科学分析

1 はじめに	24
2 試 料	24
3 分析方法	24
4 結 果	25
5 考 察	25

第VI章 ま と め

1 加茂城跡の縄張りの特徴について	26
2 加茂城跡の位置付け	26

《引用・参考文献》 27

《別 表》

1 加茂城跡主要遺構観察表	29
2 加茂城跡土器・陶磁器観察表	31
3 加茂城跡金属製品観察表	31
4 加茂城跡石製品観察表	31

《報告書抄録》 卷末

《付 図》 加茂城跡現況地形測量図 (S=1:1,000)

挿 図 目 次

第 1 図 加茂城跡位置図 (S=1: 300,000)	1	第 8 図 加茂城跡測量調査基準点網図 (S=1: 5,000).....	11
第 2 図 加茂城跡縄張り図	3	第 9 図 設置標柱.....	13
第 3 図 青海神社と加茂城跡周辺図	4	第 10 図 加茂城跡リーフレット.....	15
第 4 図 加茂城跡の位置図 (S=1: 100,000).....	6	第 11 図 加茂城跡遺物採集位置図.....	23
第 5 図 加茂城跡周辺の地形図 (S=1: 20,000)	6	第 12 図 歴年較正結果	25
第 6 図 加茂城跡周辺の地籍図 (S ≈ 1: 6,000)	8		
第 7 図 加茂城跡周辺の中世遺跡位置図 (S=1: 50,000)	9		

表 目 次

第 1 表 加茂城跡周辺の中世遺跡一覧表	9	第 3 表 放射性炭素年代測定および歴年較正結果	25
第 2 表 基準点の座標値一覧表	11		

図版目次

図版 1 加茂城跡位置図 (S=1: 10,000)	図版 11 加茂城跡地形測量個別図 (7) (S=1: 500)
図版 2 加茂城跡位置図 (S=1: 5,000)	図版 12 加茂城跡地形測量個別図 (8) (S=1: 500)
図版 3 加茂城跡地形測量全体図 (S=1: 2,000)	図版 13 加茂城跡地形測量個別図 (9) (S=1: 500)
図版 4 加茂城跡地形測量全体図 (S=1: 2,500)	図版 14 加茂城跡断面図 (1) (S=1: 500・1,000)
図版 5 加茂城跡地形測量個別図 (1) (S=1: 500)	図版 15 加茂城跡断面図 (2) (S=1: 500・1,000)
図版 6 加茂城跡地形測量個別図 (2) (S=1: 500)	図版 16 加茂城跡確認調査トレンチ平面・断面図 (S=1: 60)
図版 7 加茂城跡地形測量個別図 (3) (S=1: 500)	図版 17 加茂城跡周辺地形立体図
図版 8 加茂城跡地形測量個別図 (4) (S=1: 500)	図版 18 加茂城跡立体図
図版 9 加茂城跡地形測量個別図 (5) (S=1: 500)	図版 19 加茂城跡遺物
図版 10 加茂城跡地形測量個別図 (6) (S=1: 500)	

写真図版目次

写真図版 1 加茂城跡周辺空中写真	写真図版 11 曲輪 6・7 (1)
写真図版 2 加茂城跡周辺空中写真	写真図版 12 曲輪 7 (2)・8
写真図版 3 加茂城跡周辺空中写真・遠景写真	写真図版 13 堀切 1・2
写真図版 4 加茂城跡に登る道	写真図版 14 堀切 3
写真図版 5 調査風景	写真図版 15 堀切 4・5
写真図版 6 曲輪 1	写真図版 16 堀切 6
写真図版 7 曲輪 2	写真図版 17 堀切 7・8
写真図版 8 曲輪 3	写真図版 18 堀切 9
写真図版 9 曲輪 4	写真図版 19 通路 1・2
写真図版 10 曲輪 5	写真図版 20 遺物

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

加茂城跡は、その名が史料に見えることや加茂市内の山城の中では格段に規模が大きいことなどから文化財として高く評価され、昭和 50 年 1 月 12 日付けで加茂市指定史跡となった。この時の名称は「加茂要害城砦跡」である。また、遺跡の登録名は所在地の小字が要害であることから「加茂要害城砦跡」であったが、加茂の郷土史家の報告では「加茂城」の名称も用いられている〔古川 1980・長谷川 2009〕。様々な文献に「加茂要害山城跡」、「要害山城跡」、「加茂山要害城砦跡」と類似しながらも異なる名称が付与される状況にあり混乱を招いていた。そんな中、平成 24 年度の国の緊急雇用創出事業を活用した加茂市の事業のひとつとして遺跡発掘調査事業が計画され、事業の性格や遺跡の重要性から後に県指定史跡への格上げを目指すことも念頭に置きながら、加茂城跡を対象遺跡とすることとした。また、観光行政の基礎資料を得る目的もあったことから、簡単な加茂城跡の紹介リーフレットを作成し、城跡の要所で標柱を設置することを計画した。そして、この調査を契機として平成 25 年 4 月に遺跡登録名を「加茂城跡」と修正し、今後は統一することとした。

平成 24 年度の調査は加茂市教育委員会（以下、市教委）で、平成 24 年 6 月～8 月に五番町区長をはじめ地権者 14 名、関係者に説明を行い、同時に調査の承諾を得た。市教委は、調査の時期を落葉後に設定し、それまでに委託業者選定や最終的な土地所有者の承諾書を得るなどして、調査開始に備えた。また、文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告について平成 24 年 8 月 22 日付け民資第 137 号で新潟県教育委員会教育長宛に行った。その後、平成 27 年度に平成 24 年度に測量を実施できなかった区域について、国庫補助金を得て行い、両者をあわせた成果を報告書として刊行することとした。

遺跡発掘調査事業に対して格別なるご理解とご配慮を賜った地権者および関係者の皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第である。



第 1 図 加茂城跡位置図 (S=1:300,000)

（国土地理院 平成 17 年発行〔新潟〕・平成 25 年発行〔長岡〕 S=1:200,000 基図）

2 史料に見える加茂城跡

加茂城跡に関係した伝承や史料はいくつか知られている。しかし、城主や城歴などは不明な点が多い。明治9年（1876）頃の加茂町の地図を記した『加茂町誌史料』の古跡の項目に、以下の記述がある。

「砦城。字要害と唱フ。年号干支不詳ナレドモ、元亀元年庚午ノ年ナランカ。里人ノ言ヒ伝フル所ハ、上杉氏領國ノ御、家臣早部甚甫守始メテ砦ヲ築キ、コレニ居ル。夫ヨリ長尾加賀守、又本庄備前守、又宇佐美平六、又栗山大学、又和田清八、又小田切主膳、又下越左京迄八人居住シ、上杉氏会津ニ移ルニ及ビテ、自カラ毀ル由、今ニ至リテ、土ヲ墾チテ、往々古戦具得ル有リ。又焼米ノ出ヅル所有リ。依テ其ノ大略ヲ記ス。」〔加茂市 1975a〕

元亀元年（1570）に上杉氏の家臣早部甚甫守が築城し、以来長尾加賀守、本庄備前守、宇佐美平六、栗山大学、和田清八、小田切主膳、下越左京が居住したとするが確証はない。

また、史料の上に見える加茂城跡に関するものを年代の古いものから記す。

① 天正8年（1580）4月22日付「上杉景勝書状」（『古代・中世』第134号〔加茂市 2005〕）

（柳原城）
「重而飛脚到来、喜悦候、仍被脚力如見聞、今廿二宿城相破、数多討捕、中城迄放火、如何ニも仕合可然候、將亦、貞茂山取詰、于今張陣之由、大義察之候、爰元隙明候間、近日大崎口へ可下馬候条、
參陣尤候、雖無申迄候、貞茂山可被付落居事簡要候、諭言、
（天正八年）
卯月廿二日
（銅幟）
菅名但馬守殿」

（上杉）
景勝

上杉景勝が菅名綱輔に宛てた書状で、菅名綱輔が加茂山の城を攻撃していることをねぎらい、加茂山の城を早く攻め落とすことを命じたものである。ここに見える加茂山の城が加茂城跡と考えられている。

② 文禄3年（1594）3月「定納員數目録」（『古代・中世』第144号〔加茂市 2005〕）

「（前略） 加茂在番

（頭長）
本庄豈後抱

一、百石	太田源五左衛門
右関東管領様衆、父ハ式部ト云、此源五左衛門、後清兵衛ト改ム、若名九右衛門、三楽斎子、此弟	（太田貞正）
モ式部ト云、其弟民部ト云	

二、五拾二石三斗	高野与十郎
----------	-------

一、同	高橋内記
-----	------

一、同	根岸權三郎
-----	-------

一、同	水橋宮内
-----	------

一、同	寺島和泉
-----	------

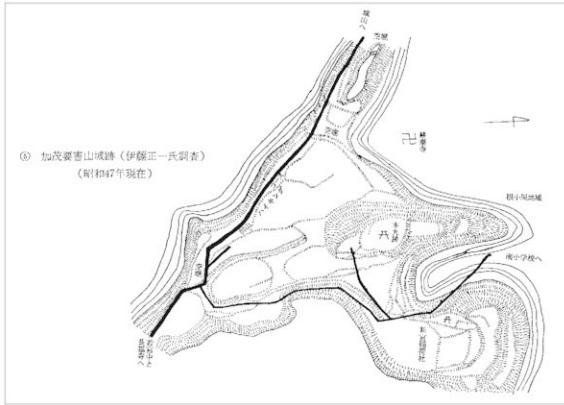
（後略）

〔文禄三年九月日〕

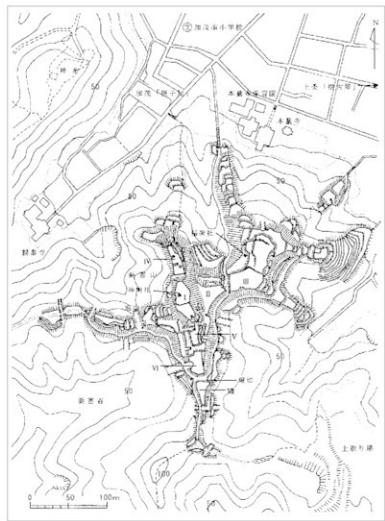
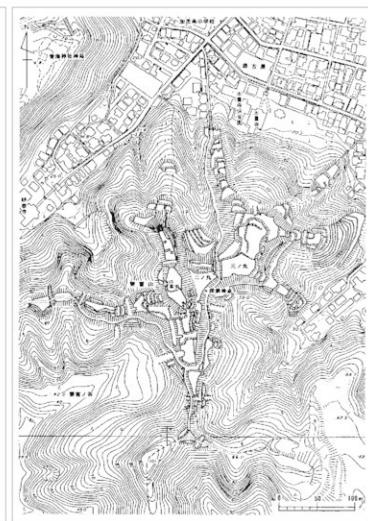
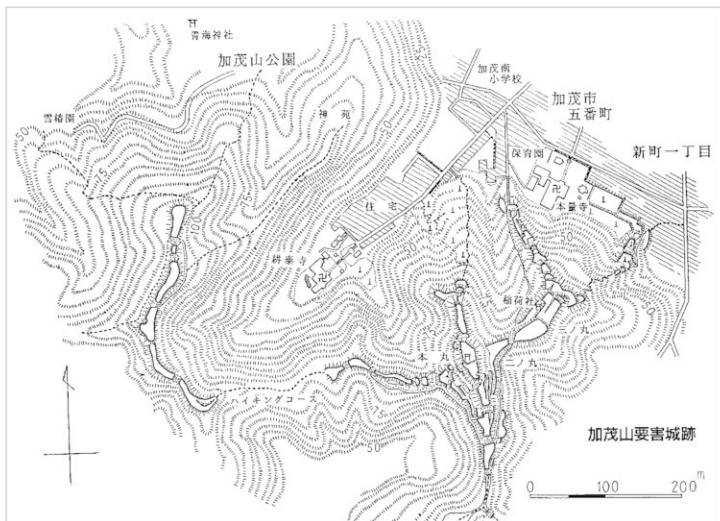
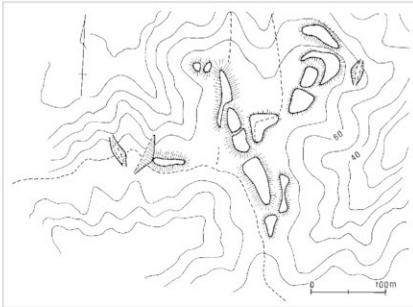
これは、上杉家臣団の定納高と軍役人数を書き上げた内容で、加茂城の城将・城兵に関する唯一の確実な史料とされている。

③ 康慶5年（1600）9月「堀秀治書状」（『近世』第6号〔加茂市 2008〕）

（田上町）
「（前略）就ては最前より如申候加茂并謨摩堂・雷三ヶ所に一揆未楯籠在之由候条、我等事來十五日に



① [加茂市 1975b] から転載



③ [大家 1998] から転載

④ [鳴海 2003] から転載

第2図 加茂城跡縦張り図

春日山令出馬、則右之構共為可打破候、其日限被勘定、三条に而出合候様に其地可被罷立候、(後略)
これは、慶長 5 年におきた「越後一揆」の際に、加茂城、護摩堂城、雷城に一揆勢が立て籠もったことに対し、堀秀治が諸将に討伐を命じたものである。

以上の史料から、遅くとも天正 8 年 (1580) には加茂城を含む加茂山で戦闘が見られたこと、上杉影虎方の勢力に与していたこと、小泉庄 (現 村上市) を治めていた本庄繁長の長男である本庄頼長が領主となり、加茂在番衆として 6 名の家臣を抱えていたこと、近世初期の越後一揆にも争いの舞台となっていたことなどを知ることができる。

3 加茂城跡の既往の調査研究略史 (第 2・3 図)

加茂城跡の縄張り図はこれまでに山城研究者により作成されたものが市史や報告書などに掲載され、考察が加えられている。早くは昭和 50 年刊行の旧版『加茂市史』下巻で伊藤正一氏調査による見取図 (①) が掲載された。昭和 62 年刊行の『新潟県中世城館等分布調査報告書』では田中真吾氏作成の見取図 (②) が掲載された。平成 10 年には大冢健氏の縄張り図 (③)、平成 15 年、平成 23 年には鳴海忠夫氏の縄張り図 (④、⑤) が発表された。

その中で、鳴海氏は「加茂要害山城は大形化した曲輪群と高度化した切岸、明瞭な虎口施設、堀切の多用など戦国期城郭としての特色をよく残している」〔鳴海 2003〕と評価され、「とくに曲輪の大形化と堀切の箱型化が注目される」〔鳴海 2011〕としている。

金子拓男氏は空堀の分類で、加茂城の堀切が「箱型研堀」の形状に属することを指摘し、県内の 30 近くの「箱型研堀」を持つ山城の事例と史料の検討から「箱型研堀」の成立を天正 11 年 (1583) を上限とすると述べられている〔金子 2014〕。この見解に従えば加茂城の築城年代の推定に役立てることができる。なお、鳴海氏も、天正 6 年 (1578) に始まつた御館の乱が、大掛かりな城普請の時期と考えられている〔鳴海 2011〕。

また、日本中世史家の藤木久志氏は加茂山の城砦群（西から尾振山城跡、剣ヶ峰城跡、加茂城跡）の城主は青海神社（土着の領主）であったとする考えを述べられている〔藤木 2009・2010〕。それは、全域ではないが、土地の所有者が青海神社であることや地形環境などから城をもつ神社として見ている（第 3 図）。



第 3 図 青海神社と加茂城跡周辺図
〔藤木 2010〕から転載

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

1 加茂城跡の地理的環境（第4・5図）

加茂市の市域は、東西に細長い形状で、東西方向約17.08km、南北方向約7.76kmで面積約133.68km²である。新潟県のはば中央部に位置し、中越地方に属する。県庁所在地である新潟市まで北方面に約30km、長岡市までが南西方面に約40kmの距離である。

加茂町は昭和29年3月、下条村を合併し、市制を施行した。同年11月に七谷村、30年11月に須田村を合併し、概ね現在の加茂市の姿が形成された。現在の加茂市の人口は約29,000人を数える。加茂川上流部から七谷、加茂、下条、須田の4地区に区分けされ、地区別面積比率はそれぞれ、七谷が60.6%、加茂が20.9%、下条が12.8%、須田が5.7%である。

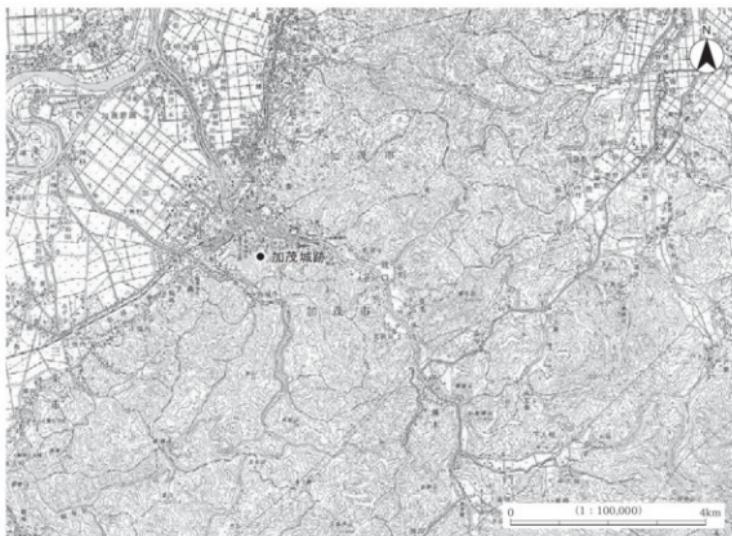
加茂市の気象概況は平成22～26年の5か年の各平均で気温13.1～13.8℃、降水量1,922.5～2,667.0mm、降雪量280～568cmである（加茂市2015）。特に七谷地区は豪雪地帯として知られる。

加茂市は古くから清流加茂川が三方を山野に囲まれた風光明媚な景観を育み、市街地を縱貫して信濃川に注ぐ地理や京都賀茂別雷神社と賀茂御祖神社の分霊が賀茂神社の神領として遷祀されていることなどに由来し、「北越の小京都」とよばれる。市域最南東部に位置する標高約1,293mの栗ヶ岳（県立自然公園）を水源とする加茂川は市域を東西に二分する形で縱貫し流れる。上流部の七谷地区で小保川（延長約1.3km）、小乙川（延長約2.0km）、高柳川（延長約3.5km）、大谷川（延長約3.4km）、西山川（延長約4.6km）などの支流を含し、谷底平野と市街地を縱貫し、流域延長約17.7kmで市域北西部に位置する信濃川に注ぐ。地勢はほとんどが山地、丘陵で占められる。東部地区に栗ヶ岳、権ノ神岳（標高約1,122m）、堂ノ崖山（標高約1,088m）、白山（標高約1,012m）などの標高1,000m級の山地がそびえ立ち、緩やかに高度を下げながら、七谷地区において山間地が展開する。加茂川流域および支流域沿いには小規模ながら段丘地形が形成され、旧石器時代～縄文時代の遺跡が多数確認されている。七谷地区を抜けた市域中央部付近の丘陵は新潟平野南東部の東山丘陵の一角を占め、加茂川がこの東山丘陵を抜け出る周辺に小規模ながら展開する扇状地形に現在の市街地が重なる。その北西部は信濃川に向かい低平な沖積地が展開する。加茂川とほぼ平行するように流れる信濃川支流の下条川は、高館山背後の沢から源を発し、丘陵地を開析し、全長約10.6kmで大字天神林地内において信濃川に注ぐ。

加茂城跡は加茂川が東山丘陵を抜け出る付近の左岸にある標高約102mの通称要害山に立地する。北麓の宅地との比高差は約86mである。山頂（曲輪1）付近から北部方向の眺望は開け、新潟市の方面まで視認することが可能である。また、眼下に商店街の町並みや加茂川を見下ろし、加茂川を挟んだ対岸には上条前山城跡を見ることができる。

2 加茂城跡周辺の小字名と中世遺跡（第6・7図、第1表）

加茂城跡は大字加茂と大字下条の字界にまたがって存在する。城城の小字は加茂地内が字要害、七澤、下条地内が字糠窪、要害谷、五百刈など城跡に関連した名称が残る。地籍図では城域のほとんどが山林で



第4図 加茂城跡の位置図 (S=1:100,000)
(国土地理院 平成9年発行(新津)・平成17年発行(加茂) S=1:50,000 原図に一部加筆)



第5図 加茂城跡周辺の地形図 (S=1:20,000)
(加茂市 平成20年印刷 [加茂市街図] S=1:10,000 原図)

あるが、本丸などは畠として利用されている。また、加茂城跡の北麓直下には大字加茂字根子屋、大字上条字根古屋の地名が残る。「根子屋」と「根古屋」は同義と考えられるが、城下の地名であることから家臣などが居住した地区と考えられている〔鳴海 1999〕。地籍図には大半が水田となっている。

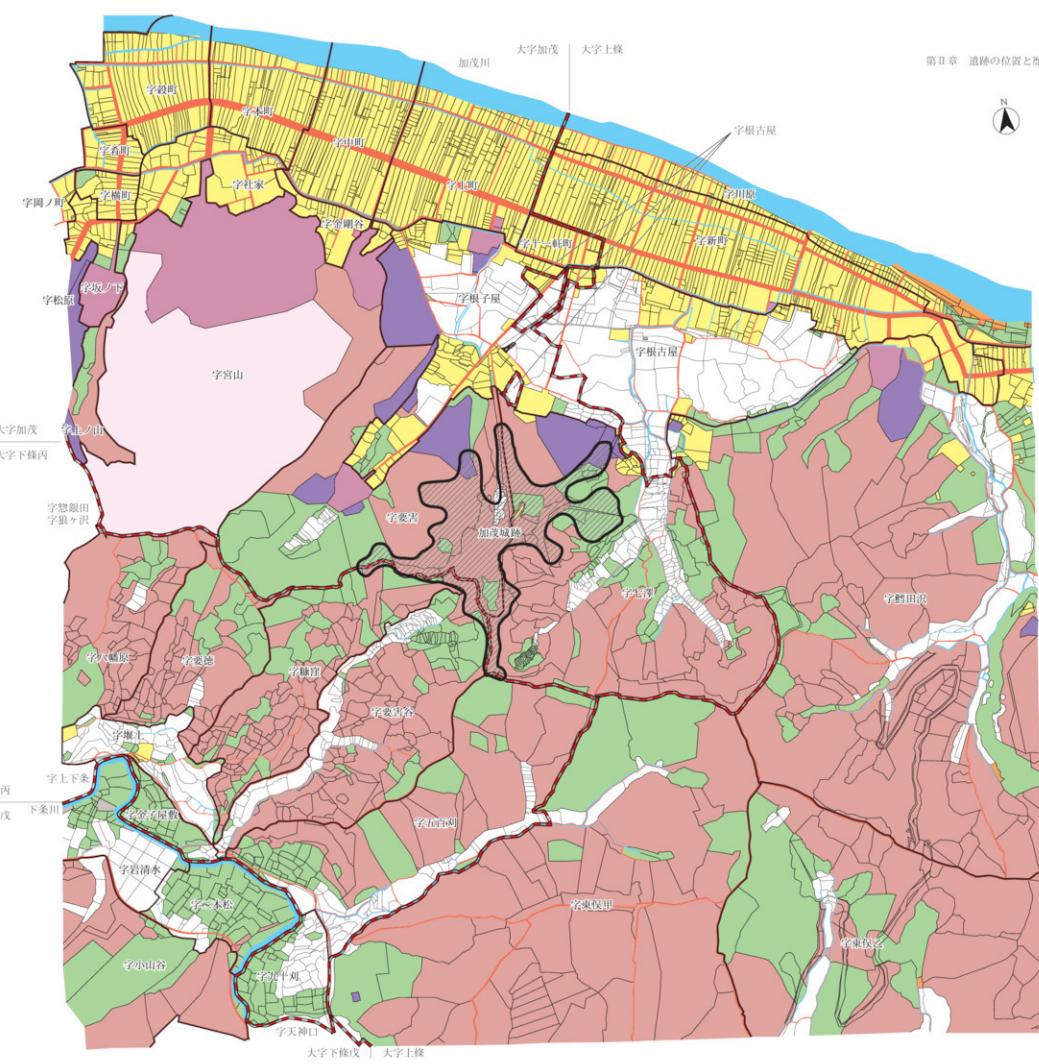
加茂城跡近辺で中世遺跡の本発掘調査が行われた事例はないが、北西方向に広がる沖積地では集落跡が発掘調査されている。馬越遺跡（5）では井戸跡が調査され、漆器や箸状木製品など埋井の儀式が確認されている〔伊藤 2010〕。釜湧遺跡（13）、中沢遺跡（14）でも中世の遺構、遺物が確認されている〔伊藤 1998〕。また、加茂川を挟んだ対岸の上条前山城跡（41）の直下に位置する舞台遺跡（42）からは河川跡が見つかり、呪符木簡や下駄、杓子など多彩な木製品とかわらけ、珠洲焼などが出土した。屋敷田遺跡（44）でも中世の遺構、遺物が確認されている〔伊藤 1996〕。いずれの遺跡も鎌倉時代頃を中心とし、加茂城跡の戦国時代よりも古い時期である。

集落以外では経塚、寺社跡、古銭出土地など多岐にわたる遺跡が確認されている。加茂城跡の周辺では青海神社経塚 A（21）、同 B（22）、同 C（23）が確認され、上条前山城跡（41）の周辺で上条前山経塚（46）が確認されており、山城に先行して信仰関連の遺跡が築かれていることが両者に共通している。社寺跡は現在の青海神社境内地内にある青海神社遺跡（20）、現在の宮山貴船神社の社殿下にある宮山貴船神社遺跡（19）や下条川上流部にある長福寺跡（35）、長福寺跡に関係したと見られる天徳寺遺跡（36）がある。長福寺は鎌倉時代末期に開山された寺で、慶長 3 年（1598）の上杉景勝の会津移封に伴い廃寺となつた。岡ノ町古銭出土地（17）は珠洲焼の壺 2 個体に古銭が納められ、埋められていた。うちひとつは、最古銭が「五銖」、最新銭が「至大通寶」、もうひとつは最古銭が「開元通寶」、最新銭が「嘉定通寶」である。

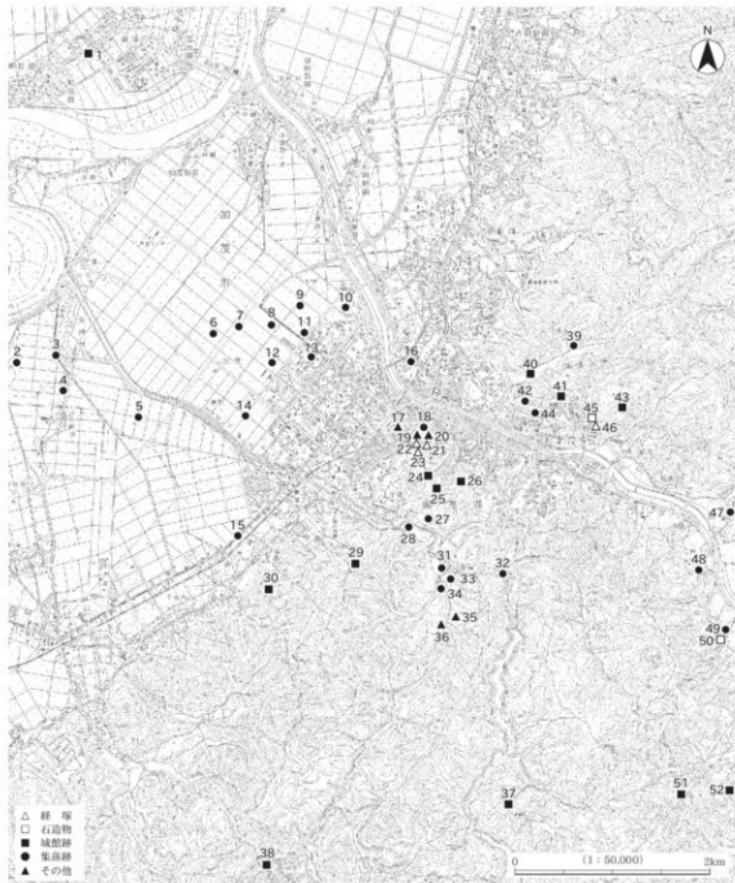
加茂城跡は加茂川左岸の同じ尾根続きで約 800m の範囲で北西方向の丘陵上に劍ヶ峰城跡（25）と尾振山城跡（24）が連なって所在する。別名で三つの城跡に分けて把握されているが、それぞれが有機的に結びついで戦略的に構築された一群として見る事もできる。いずれも戦国時代としか言えないが同時期に機能した可能性が高い。加茂川を挟んだ東方向対岸には上条前山城跡（41）と御廟廬城跡（43）が対峙する位置にある。上条前山城跡の北西直下の谷の開口付近に館ノ腰館跡（40）があり、明治の地籍図には方形の地割が確認されるものの、遺構、遺物は明確でない〔鳴海 1994・伊藤 1998〕。南西方向の下条川を越えた丘陵上には下条尋城跡（29）、下条城跡（30）が位置する。また、加茂城跡から 3 ~ 4km ほど丘陵奥地に高館城跡（37）と姫ノ城跡（38）が位置している。

加茂城跡の周辺の麓にはいくつかの寺院が存在するが、北西麓の谷奥部に位置する耕泰寺は加茂城城主宇佐美平六により創建されたと伝わる。

なお、加茂城跡の北麓、加茂川沿いに展開する短冊状の地割りは大字加茂地内の西から字横町、穀町、本町、中町、上町、大字上条地内の字新町に設けられている。関正平氏の研究によれば、近世加茂町の形成期を古川家文書「寛文 12 年御宮建立・入目之事」の記述から万治 3 年（1660）とする考えがあること、加茂町が新発田藩政下で町場として位置づけられた時を町年寄の役人名が文書に初見する天和 2 年（1682）とされること、近世初期の加茂町は本町、中町あたりを中心とし、延宝年間（1673 ~ 1680）の初め頃に上町あたりが成立したこと、上条新町は元禄 3 年（1690）に町建てされたことが知られる〔関 1997〕。このことから明治期の地籍図に描かれた短冊状の地割りは、17 世紀後半頃を中心とした町建ての反映と推測できる。しかし、慶安元年（1648）の絵図にはすでに町並みの景観が描かれていることから、さらに古い時期に町場として成立していた可能性が高い。



第6図 加茂城跡周辺の地籍図（明治25年2・3・5月調整）(S=1/6,000)



第7図 加茂城跡周辺の中世道路位置図 (S = 1 : 50,000)

(国土地理院 平成22年発行(矢代版)・平成14年発行(加茂) S=1:25,000 原図)

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	羽林道跡	集落跡	中世	14	中村道跡	集落跡	古代・近世	27	東上交通跡	遺物生糞地	中世	41	御ノ瀬跡	城型跡	中世
2	大野道跡	遺物生糞地	中世	15	山越道跡	遺物生糞地	古代・中世	28	235木造跡	遺物生糞地	中世	42	上多治山城跡	城型跡	中世
3	猪ノ尾道跡	遺物生糞地	中世	16	千束道跡	遺物生糞地	古代・中世	29	下千束城跡	城型跡	中世	43	野白道跡	集落跡	中世
4	西九津川道跡	集落跡	古代・中世	17	阿寺人見山城跡	人見山城	中世	30	下木田跡	城型跡	中世	44	御前沢城跡	城型跡	中世
5	馬鹿道跡	集落跡	古墳・中世	18	加茂方舟水道跡	遺物生糞地	萬葉・古代・中世	31	天神口道跡	遺物生糞地	古代・中世	45	星置町の石塙跡A	石塙	中世
6	八川田道跡	遺物生糞地	古代・中世	19	山田森谷水道跡	古寺跡	古代・中世	32	足守道跡	遺物生糞地	萬葉・古代・中世	46	上多治山跡	跡跡	中世
7	丸山道跡	遺物生糞地	古墳・中世	20	青森井ノ道跡	古寺跡	古代・中世	33	云母子小丸道跡	遺物生糞地	古代・中世	47	小糸道跡	遺物生糞地	中世?
8	5.5河川道跡	遺物生糞地	古代・中世	21	吉森井ノ新入人跡	跡	中世	34	云母子大丸道跡	遺物生糞地	古代・中世	48	芦ノ川道跡	遺物生糞地	萬葉・古代・中世
9	舟川道跡	遺物生糞地	古代・中世	22	吉森井ノ新入人跡	跡	中世	35	長坂道跡	丘陵跡	中世	49	元賀口道跡	遺物生糞地	古代・中世
10	石川道跡	遺物生糞地	古墳・中世	23	吉森井ノ新入人跡	跡	中世	36	大路子平道跡	丘陵跡	中世	50	企多半毛地の城跡	城型跡	中世
11	先走道跡	遺物生糞地	古墳・中世	24	尾尾山城跡	城型跡	中世	37	高岡城跡	城型跡	中世	51	西ノ瀬城跡	城型跡	中世
12	船川道跡	遺物生糞地	古代・中世	25	御ノ崎跡	城型跡	中世	38	778跡	城型跡	中世	52	西ノ瀬城跡	城型跡	中世
13	玉川道跡	集落跡	古墳・中世	26	8074088	城型跡	中世	39	御室山道跡	遺物生糞地	古代・中世				

第1表 加茂城跡周辺の中世道路一覧表

第III章 調査の概要

1 調査の概要

平成24年度の調査は加茂城跡の縄張りを把握するための詳細な地形測量と曲輪内部の遺構と城が存続した年代の遺物の出土を期待して確認調査を行った。地形測量は城館研究者により描かれた縄張り図を参考にしながら、草叢に覆われた山城を人力で草や木を除去しながら行い、あわせて主要な遺構については写真撮影を行える状況にした。その結果、多くの平坦地や堀などが良好な形で確認され、特に本丸付近に位置する曲輪からは優れた眺望が確認できた。確認調査のトレントは主な曲輪に設定したが、特に成果を得ることはできなかった。平成27年度の調査は從前調査で実施できなかった区域について詳細な地形測量を行い、現状で認識できた山城の縄張りを網羅する現況地形図面の完成を目指した。

2 調査方法(第8図、第2表)

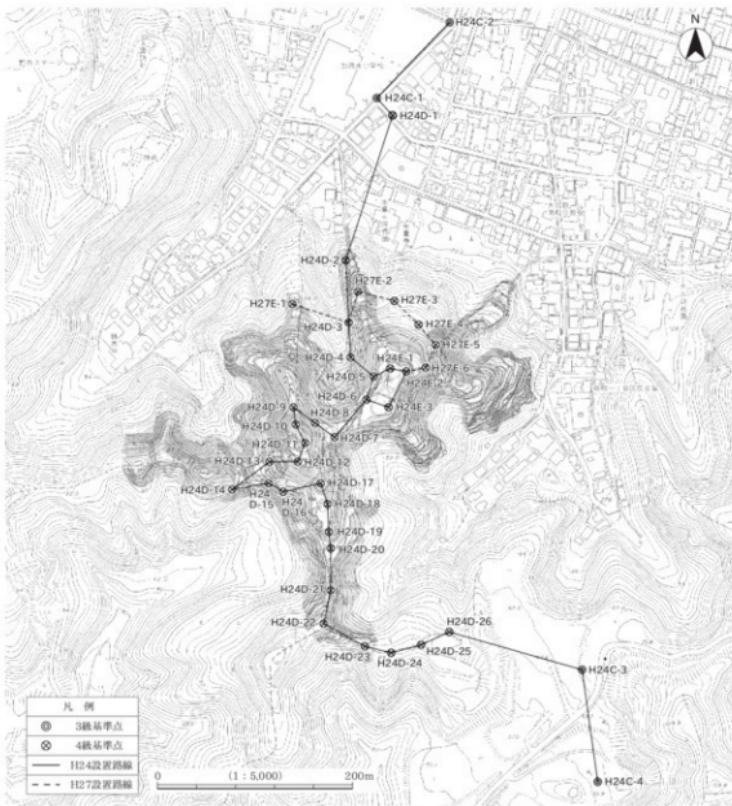
A 平成24年度

鳴海氏が作成された縄張り図(鳴海2011)を参考にして、最高所に位置する本丸(曲輪1)から順次、雜草・雜木の伐採を行い、各遺構の形状を明瞭な形で顕現させた。その後、地形測量と主な遺構についてのみ写真撮影を行った。地形測量の実施面積は約50,850m²(その1業務:約29,850m²、その2業務:約21,000m²)である。また、城の時期や建物などの存在を確認する目的で、任意に5か所トレントを設定した。合計の調査面積は約48m²である。

測量調査 測量調査開始前に、現地踏査を行い基準点の選定を行った。GNSS(GPS)測量機で3級基準点を4点新設した後に、地形測量を実施する範囲に4級基準点29点をトータルステーションにて観測し設置した(第8図、第2表)。測地系は世界測地系、座標系はWGS系である。水準測量の標高の基準は加茂南小学校近傍に設置した3級基準点(24C-2)をBMとして、新設基準点へオートレベルを使用し標高の取り付けを行った。その後、雜草・雜木の伐採作業が終了した地点からトータルステーションを用いた3次元座標取得の地形測量を実施した。各遺構の確認には以前作成された縄張り図(鳴海2011)を参考にし、遺構の再検証を行いながら作成を進めた。また、草木に隠れた未確認の遺構の有無についても確認した。完成図面の仕様については、全体の地形図と縄張り図の縮尺を1:1,000(等高線間隔50cm)、詳細図の縮尺を1:500(等高線間隔25cm)とした。

確認調査 各トレントの設定は任意で行った。 $2 \times 5\text{m}$ の長方形を基本とした。表土掘削および遺構掘削は手作業で行い、確認した土坑やピットなどは半截し、覆土の観察をするにとどめた。各トレントの平面図の作成には、トータルステーションを使用し測量を行った。断面図は手実測で行い、セクションポイントはトータルステーションで測量した。写真撮影は、株式会社ニコン製のデジタル一眼レフカメラ「D3000」を使用した。有効画素数1,020万画素、最大記録画素数は3,872×2,592ピクセル(サイズL)で、最大サイズに設定して撮影した。

調査員、作業員は毎朝、加茂市民俗資料館に集合し、朝礼とラジオ体操を実施した。その後、自動車で



第8図 加茂城跡測量調査基準点網図 (S=1:5,000)

(加茂市 平成18年印刷 [加茂市街図 その12]・平成3年印刷 [加茂市街図 その15] S=1:2,500 基準)

基準点名	座標	座標		標高	備考
		N緯度	E経度		
H24C-1	182805.588	490003.504	37°39'21.288E	139°03'31.640N	14.719
H24C-2	182973.144	490178.307	37°39'23.887E	139°03'34.711N	14.679
H24C-3	183209.952	49014.098	37°39'23.480E	139°03'40.080N	63.768
H24C-4	183193.516	490303.155	37°38'58.476E	139°03'40.716N	53.633
H24D-1	183877.814	49019.679	37°39'20.806E	139°03'32.298N	14.579
H24D-2	183728.275	49021.755	37°39'58.970E	139°03'30.365N	43.187
H24D-3	183665.610	49024.785	37°39'33.631E	139°03'30.411N	59.299
H24D-4	183626.936	49027.681	37°39'12.773E	139°03'30.481N	64.847
H24D-5	183611.031	490300.264	37°39'12.134E	139°03'31.430N	81.928
H24D-6	183686.756	490292.970	37°39'11.360E	139°03'31.135N	85.904
H24D-7	183548.184	490260.307	37°39'10.257E	139°03'29.793N	88.217
H24D-8	183561.601	490240.308	37°39'10.600E	139°03'28.977N	90.283
H24D-9	183578.759	490218.052	37°39'11.289E	139°03'28.075N	95.404
H24D-10	183561.208	490204.744	37°39'09.556E	139°03'28.172N	101.565
H24D-11	183543.208	49020.978	37°39'09.940E	139°03'28.555N	101.115
H24D-12	183523.081	49022.465	37°39'09.318E	139°03'28.244N	99.191
H24D-13	183522.886	491193.398	37°39'09.318E	139°03'27.050N	85.117
H24D-14	183494.615	49155.137	37°39'08.408E	139°03'27.293N	82.262
H24D-15	183500.904	49192.563	37°39'08.608E	139°03'27.018N	81.269
H24D-16	183492.205	49097.466	37°39'08.329E	139°03'27.626N	82.627
48番 基準点					
備考					
H24D-17	183500.924	490245.828	37°39'08'50.9E	139°03'29.191N	94.792
H24D-18	183479.720	490253.064	37°39'07.906E	139°03'29.481N	91.996
H24D-19	183451.182	490254.229	37°39'06.980E	139°03'29.522N	86.765
H24D-20	183434.450	490256.271	37°39'06.437E	139°03'29.601N	86.831
H24D-21	183391.386	490256.237	37°39'05.040E	139°03'29.580N	88.145
H24D-22	183357.344	490249.030	37°39'03.937E	139°03'29.287N	92.662
H24D-23	183333.975	490261.271	37°39'03.117E	139°03'31.005N	85.319
H24D-24	183327.286	490218.261	37°39'02.948E	139°03'32.104N	88.996
H24D-25	183333.459	490248.909	37°39'02.108E	139°03'33.356N	88.544
H24D-26	183348.701	490277.838	37°39'01.632E	139°03'34.340N	81.897
H24E-1	183818.552	490171.191	37°39'11.230E	139°03'32.131N	87.269
H24E-2	183816.511	490333.783	37°39'11.296E	139°03'32.808N	86.483
H24E-3	183878.830	49015.629	37°39'11.106E	139°03'32.058N	87.284
H24E-4	183865.630	49016.785	37°39'11.466E	139°03'28.051N	80.299
H24E-5	183869.316	49024.113	37°39'11.406E	139°03'30.801N	55.246
H24E-6	183867.717	49021.631	37°39'11.639N	139°03'32.329N	56.199
H24E-7	183861.334	49046.448	37°39'11.844E	139°03'33.330N	65.968
H24E-8	183842.790	49063.978	37°39'11.744E	139°03'34.046N	70.824
H24E-9	183869.142	49053.663	37°39'11.240E	139°03'33.610N	80.740

第2表 基準点の座標値一覧表

3 調査の経過

登り口②まで移動し、加茂城に登った。昼食休憩は加茂山公園にある加茂市公民館を借用した。加茂城跡へは一日で午前1、午後1の合計2往復する形となった。なお、調査終了後に6か所の堀切へ手作りの案内標柱を設置した（第9図）。また、本事業の成果品として案内リーフレットを作成した（第10図）。

B 平成27年度

平成24年度調査で測量することができなかつた範囲を対象として地形測量を実施した。測量方法は平成24年度と同じである。対象地は雑草・雜木がそれほど繁茂でないことから伐採は行わなかつた。地形測量の実施面積は約10,600m²で、平成24年度と合わせると約61,450m²となる。そして、平成24年度の成果と合成させた測量図面を作成し、報告書を編集することとした。

3 調査の経過

平成24年度その1業務の調査体制は、市教委の調査担当1名と発掘調査支援業務として委託した民間会社の測量調査担当1名、確認調査担当1名、測量補助員1名、作業員は当初6名でスタートし最終的には7名体制で行った。その2業務は民間会社の測量調査担当1名、測量補助員1名、作業員は5名でスタートした。作業が重なる10月下旬以降は最大で作業員12名で調査を行つた。委託事業の契約期間はその1が平成24年7月20日～平成25年1月31日、その2が平成24年10月15日～平成25年3月22日である。そのうち調査期間は9月4日～12月21日、整理期間が12月25日～3月22日である。その1とその2業務をあわせて、調査期間の実働日56日間、延べ作業員数472名であった。平成27年度は市教委の調査担当1名と民間会社の測量調査担当1名、測量補助員3名で、二班体制で行った。

以下、調査日誌を参照に作業経過などについて記す。

<調査および作業の経過>

平成24年度 その1業務

9月4日(火) 加茂市公民館にて開所式と安全確認を行つた後、調査員と作業員6名で現地踏査を行う。

9月5日(水)～7日(金) 曲輪1、曲輪2から草刈作業を開始する。5日(水)に休憩テントの撤入、設置を行う。6日(木) 雨で作業中止。

9月10日(月)～14日(金) 草刈作業を継続する。GPS基準点測量と水準測量を行う。11日(火)雨で作業中止。13日(木) 横山勝栄氏、鳴海忠夫氏来跡。

9月18日(火)～20日(木) 曲輪6、曲輪8周辺の草刈作業と水準測量を行う。21日(金) 雨で作業中止。

9月25日(火)～28日(金) 曲輪4周辺などの草刈作業と水準測量、基準点測量を行う。28日(金)曲輪1から地形測量開始する。

10月1日(月)～5日(金) 曲輪1、曲輪4、曲輪6、曲輪7周辺の草刈、清掃作業を行う。各施設の記録写真撮影を開始する。4日(木) 1トレンチの掘削作業開始する。

10月9日(火)～12日(金) 曲輪1周辺の草刈作業と曲輪2周辺の地形測量、1～3トレンチの掘削作業を行う。

10月15日(月)～19日(金) 曲輪5、堀切2周辺の草刈、清掃作業、地形測量、3トレンチの掘削作業を行う。

10月22日（月）～26日（金） 曲輪1西斜面、堀切6周辺の草刈、地形測量を行う。

10月29日（月）～11月2日（金） 曲輪7、堀切7、堀切8周辺の草刈、清掃作業、地形測量を行う。

31日（水）、2日（金） 雨で作業中止。

11月5日（月）～9日（金） 曲輪3の竹の除去、草刈作業と水準測量、基準点測量を行う。堀切6周辺の地形測量を行う。7日（水）、8日（木） 雨で作業中止。 9日（金） 新潟県文化行政課滝沢規朗氏、鳴海氏、高橋雅弘氏（山城研究者）が現地指導のため来跡。

11月12日（月）～17日（土） 曲輪3、堀切8周辺の草刈作業、地形測量を行う。14日（水）、15日（木） 雨で作業中止。

11月19日（月）～22日（木） 曲輪3、堀切8周辺の草刈作業、地形測量を行う。トレンチの埋め戻し作業を行う。20日（火） 雨で作業中止。

11月26日（月）～30日（金） 曲輪3周辺の草刈作業、地形測量を行う。トレンチの埋め戻し作業を行う。28日（水） 現場備品撤収および休憩所清掃作業を行う。閉所式。29日（木）、30日（金） 少人数で補足測量作業を行う。

12月3日（月）～21日（金） 断続的に補足測量作業を行う。

12月11日（火）～19日（水） 標柱作成と設置作業を行う。

平成24年度 その2業務 ※10・11月の作業中止日はその1と同じため省略。

10月22日（月） 加茂市公民館にて開所式と安全確認を行った後、調査員と作業員6名で現地踏査を行う。

10月24日（水）～26日（金） 繩張り西側の草刈作業を行う。

10月29日（月）～11月2日（金） 曲輪3の竹の除去、草刈作業、4トレンチの掘削作業を行う。

11月5日（月）～9日（金） 曲輪3の竹の除去、草刈作業、5トレンチの掘削作業を行う。

11月12日（月）～17日（土） 曲輪3周辺の草刈作業、堀切6の清掃、写真撮影を行う。

11月19日（月）～22日（木） 曲輪3周辺の草刈作業、地形測量、トレンチの埋め戻し作業を行う。

11月26日（月）～30日（金） 堀切9周辺の竹の除去、曲輪4北西部の草刈作業を行う。

12月3日（月）～7日（金） 曲輪4北西部の草刈作業、曲輪3周辺の地形測量、トレンチの埋め戻し作業を行う。4日（火）、5日（水） 雨で作業中止。 6日（木） 鳴海氏が現地指導のため来跡。

12月10日（月）～14日（金） 除雪を行い、曲輪4北西部周辺の地形測量、トレンチの埋め戻し、



第9図 設置標柱

標柱作成作業を行う。10日（月）雪で作業中止。

12月17日（月）～21日（金）曲輪4北西部周辺の地形測量、標柱作成と設置作業を行う。20日（木）現場備品撤収、ゴミ拾いおよび休憩所清掃作業を行う。閉所式。21日（金）少人数で補足測量作業を行う。

4 調査の体制

平成24年度では緊急雇用創出事業の趣旨および事業内容を鑑みて民間企業に業務を委託して実施することとした。その1業務の業者の選定にあたっては、測量や発掘調査の実績などを考慮し、4社に対し見積り依頼を行い、総合計額の最低価格を提示した会社と随意の委託契約を締結した。見積り合わせの結果、㈱イビソク新潟支店と跡遺発掘調査事業業務委託契約を締結した。業務の実施条件として、新潟県緊急雇用創出事業臨時特例基金事業の制度を踏まえ事業を進めるものとし、新規雇用者（失業者）の入件費の割合が事業費総額に対して50%以上とすること、労働者の募集に当たっては、公共職業安定所への求人申し込みを行うなど、募集の公開を図るものとすることとし、これらの条件を踏まえたうえで調査の体制を組み立てた。なお、その2業務については事業の継続性などを考慮し、引き続き㈱イビソク新潟支店と委託契約を締結した。㈱イビソク新潟支店は作業員の選定を進めるとともに、各業務毎に自社の社員3名を適宜現場に常駐させ、調査を進めた。市教委の調査担当者は適宜現場に常駐し、指示・監督する形態で行うこととし、㈱イビソク新潟支店には現場作業全般の労務・安全管理や作業員の指揮監督、測量作業の全体的な掌握を行うことができる測量調査担当1名とその補佐を行う測量補助員1名、確認調査や写真撮影などを行う確認調査担当1名をお願いした。なお、平成27年度においても調査の内容から、同一業者に作業を委託して実施した。

地形測量図の校正などについては、鳴海忠夫氏からご指導頂きながら進めた。報告書編集業務については而不二出版に委託して、作業の効率化を行った。

年度毎の体制は以下のとおりである。

【平成24年度】測量・確認調査

調査主体	加茂市教育委員会（教育長 殖栗敏夫）
事務局	金子正文（社会教育課長）・石井美代子（同主査）
調査担当	伊藤秀和（社会教育課係長）
調査支援業者	株式会社イビソク 新潟支店 小林成光・多田和幸（測量調査担当）
	石橋夏樹（確認調査担当）、加藤尚史・笛原義明（測量補助員）
作業員	入澤 司・久保宗太・小谷寛典・齊藤勇人・佐藤 見・鈴木 進・閔谷優子・高橋成一 高橋吉明・田中謙一郎・田辺 健・早川伸介・水信智郎

【平成27年度】測量調査・整理作業・報告書編集

調査主体	加茂市教育委員会（教育長 殖栗敏夫）
事務局	金子正文（社会教育課長）
調査担当	石井美代子（同主査）
調査支援業者	伊藤秀和（社会教育課長補佐）
	株式会社イビソク 新潟支店
	小林成光（測量調査担当）
	長谷川桂典・青木翔吾・土屋 歩（測量補助員）
整理作業員	櫻井恵美子（日々雇用職員）

【平成28年度】報告書印刷

調査主体	同左
事務局	明田川太門（社会教育課長）
調査担当	同左



第10図 加茂城跡リーフレット

第IV章 調査成果

1 測量調査

A 縄張りの概要

確認できた縄張りは、南北方向約400m×東西方向約420mの範囲にある。南北に一直線状に延びた痩せ尾根上に曲輪を造成し、要所を堀切で遮断する。この南北の尾根上のはば中央部に本丸(曲輪1)がある。その本丸から西側の剣ヶ峰城跡へと続く尾根には狭い曲輪と堀切を設ける。本丸から北東側には二ノ丸(曲輪2)、三ノ丸(曲輪3)と広い平坦面を設け、特に北西～東方向にかけての斜面部に多くの腰曲輪を配置する。各造構は標高約102mを最高所とし、標高約32mの比高差約70mの間に縄張りが展開する。また、南西部、南東部、北西部に深い谷があり、天然で堅固な要害を形成している。

確認した主な造構は、曲輪が50以上、堀切が9、通路が2である。個々の造構を結んだ外郭線内の面積は約36,593.90m²である。

B 記述の方法と施設の分類

各造構の名称については、『城館調査ハンドブック』〔千田・小島・前川1993〕や『発掘調査のてびき－各種跡遺査編一』〔文化庁文化財部記念物課2013〕で使用されている名称を参考とした。

造成された平坦地を「曲輪」、曲輪への出入り口を一般に「虎口」とよぶが、本書では「出入口」、尾根を斬ち切る掘り込みを「堀切」、斜面に築かれた道状のへこみを「通路」とした。個々の造構については種別毎に通し番号を付した(図版4)。主な造構の細かい数値などについては別表1の造構観察表に記載した。なお、小さい曲輪群などについてはそのエリアに地点名を付して一括して記述したものもある。また、曲輪の周りの斜面を切岸、土でつくった橋を土橋と記述する。なお、土塁、歓状空塁群、横堀、豊堀などは確認されていない。

個々の造構の説明にあたり、作成した測量図面は、1:2,000の全体図、1:500の分割平面図および1:500と1:1,000の断面図である。写真図版に関しては主な造構のみ選択的に使用した。

C 施設各説

1) 曲 輪

曲輪1(図版7・8、写真図版6)

標高約102mで加茂城跡の最高所に位置した本丸で屹立した地点にある。現在は杉木立が邪魔をしているが、本来は北方向の眺望に優れる。曲輪2との比高差は約13m、曲輪4との比高差は約7mである。平坦面の平面形は不整の菱形で地表面はやや不陸が認められるが、概ね平坦である。全体の規模は約49m×22mで、平面積は約600m²と大きい。内部は中央やや南寄りのところで緩やかな段差を持ち①区と②区の二区画の平地で構成される。また、南端部に溝状に張り出した③区の平地がある。①区西側は角度約42°、北側は角度約36°、東側は角度約34°の切岸となる。出入口は①区の西側と②区の南端部の2か所に設けられている。①区の西側の出入口からは、通路状の腰曲輪を通り曲輪4へ、②区の南端部の

出入口からは通路1を通って曲輪2と繋がる。②区の南西部に崩落の跡が見られる。①の東寄りに1トレンチ、②の南側に2トレンチを設定した。また、①区ほぼ中央に東向きに設けられた神明社の祠がある。

曲輪2（図版8、写真図版7）

曲輪1の東側直下に位置する。北東方向に延びて三角形状に展開する。二ノ丸に位置づけられる。現況は鬱蒼とした杉木立である。全体の規模は約33m×30mで、平面積は約453m²で本城の中心的な曲輪のひとつである。地表面は平坦で、南西から北東に向かいやや傾斜する。南端部の出入口から通路1を通って本丸へ向かう。北東の出入口から曲輪3へと繋がるが、現在は遊歩道により遮断されている。ここに空堀があったとする見解もある〔大家1998〕。なお、北側には大きな沢状地形が広がり、ところにより不整形の帯状の平坦地が数段連続している。中央やや南西寄りに5トレンチを設定した。

曲輪3（図版11、写真図版8）

曲輪2の北東に位置する。標高は曲輪2とはほぼ同じである。不整の長方形を呈し、広い平坦面を持ち、三ノ丸に位置づけられる。現況は鬱蒼とした竹林である。内部は緩やかな段差を持ち、数区画で構成される。全体の規模は約81m×34mで平面積は約1,965m²と本城で最大の曲輪である。平面積は曲輪1の3倍強、曲輪2の4倍強である。北～北東部と北西部に腰曲輪（曲輪10・11）がある。また、本曲輪から北北西、北東、東、南東方向に下る尾根には階段状の曲輪が多く配置され、本曲輪を堅固に守る防御網が構築されたと推測される。この中で、北北西と北東方向に延びる尾根のどちらかが大手路であったとする見解がある〔大家1998〕。

曲輪4（図版6、写真図版9）

曲輪1の北側直下に延びる痩せ尾根に位置する。細長い平坦面が北に向かい緩やかに傾斜する。中央付近に直径約3m、深さ約34～65cmの土坑状の凹みが3つある。南端部の曲輪1切岸付け根に堀切1が設けられる。北端部には出入口が存在し、やや急傾斜の面から複数段に造成された墓地を通り、根子屋地区に至る。このルートを掲示口とする見解がある〔大家1998〕。

曲輪5（図版8、写真図版10）

曲輪1の南東下に約5mの比高差で位置する。平面形は梢円形である。北側は曲輪1、曲輪2へと通路が分岐し、さらには斜面を下ると西側の曲輪8、9とも繋がる一種の桥形状の出入口を持つ。南側は角度約40°の切岸から曲輪6と堀切2で区切られる。東～北東方向には数段の帯状の曲輪が見られる。ここを馬出広場とする見解がある〔大家1998〕。

曲輪6（図版8、写真図版11）

曲輪5の南に位置し、曲輪9、堀切2を挟んで標高をやや減じた尾根上に造成される。平面形は不整の長方形を呈し、西側に緩やかな傾斜で繋がる平坦面がある。南側は角度約35°の切岸から曲輪7と堀切3で区切られる。東側の一部に帯状の曲輪が付設する。東、南～南西方向にかけて大きな崩落痕が見られる。中央北寄りに4トレンチを設定した。

曲輪7（図版9、写真図版11・12）

曲輪6の南に位置し、北を堀切3、南を堀切4に区切られた痩せ尾根上に造成される。平面形は不整の細長い三角形状を呈する。曲輪1との比高差は約13mである。西侧縁辺下に現在の遊歩道がある。なお、曲輪7、堀切3から堀切4の間も曲輪状の狭い平坦面が存在するが、現在は遊歩道として整備されるなど後世の改変が見られる。

曲輪 8 (図版 8、写真図版 12)

曲輪 6 の南西、曲輪 7 の北西約 2 ~ 4m 下に位置する腰曲輪である。一部は堀切 2 と重なる。西側の中央付近に主軸に直交した通路 2 が存在する。

曲輪 9 (図版 7)

曲輪 1 の南西、曲輪 5 の西下に位置する腰曲輪である。曲輪 1 とは約 16m、曲輪 5 とは約 10m の比高差がある。平面形は長方形を呈し、南西方向に緩やかに傾斜する。南西側縁辺下に現在の遊歩道がある。

曲輪 10 (図版 11)

曲輪 3 の北西部に位置する腰曲輪である。曲輪 3 と約 6m の比高差がある。南東は傾斜角度約 45° の曲輪 3 の切岸、北西は傾斜角度約 44° の斜面に囲まれる。細長い形状で、南西端部は道 A と繋がる。北東奥に江戸時代に建立された新宮稻荷社の祠や鷺尾甚助が奉納した一対の石灯籠がある。

曲輪 11 (図版 11)

曲輪 3 の北東部に位置する腰曲輪である。円弧を描いて曲輪 3 を取り囲む。曲輪 3 と約 3 ~ 5m の比高差である。北側は急な斜面となり、大きな崩落痕がある。北東では曲輪 15 と 16、東に B 地点、北西に A 地点へと繋がる。

曲輪 12 (図版 8)

曲輪 6 の東部に位置する腰曲輪である。曲輪 6 と約 10m の比高差がある。細長い形状で、部分的に東に張り出する。西側縁辺に沿って遊歩道がある。北側の先端付近から北と東の尾根の延長上に数段の小さな平坦面が見られる。

曲輪 13 (図版 11)

曲輪 3 の南東部から延びた尾根に築かれた。曲輪 3 から数段の腰曲輪を経て曲輪 13 に至る。曲輪 3 とは約 16m の比高差がある。平面形はほぼ正方形を呈する。尾根の先端まで帯状の曲輪が築かれる。

曲輪 14 (図版 12・13)

曲輪 3 から曲輪 11、数段の帯状の曲輪、堀切 9 を経て曲輪 14 に至る。現況は鬱蒼とした竹林である。曲輪 3 とは約 20m の比高差がある。平面形はほぼ正方形を呈する。北東と南西方向には小さな沢が入る。尾根の先端まで帯状の曲輪が大きく展開する。

曲輪 15 (図版 12)

曲輪 3、曲輪 11 から北東方向に数段の小さい平坦面を途中つづらおりの道を挟んで下りきったところに位置する。曲輪 3 とは約 46m の比高差がある。平面形はほぼ正方形を呈する。北西と南東方向には沢が入る。現況は墓地で地形が改変されている可能性もある。

曲輪 16 (図版 12)

曲輪 15 の北東に位置し、約 8m の段差を持つ。現在、内部はほぼ中央で 1m 程の段を持って二区画になっている。ともに墓地で①では大きな構造物がある。大きな地形改変が想定される。本城跡で最北東にあり、最も標高の低い地点にある曲輪である。

曲輪 17 (図版 5)

曲輪 1 から西側に延びる狭い尾根に築かれている。西側を堀切 7 に東側を堀切 6 に区切られ、北と南は急峻な斜面が迫る細長い形状を呈する。南側下に遊歩道が通る。

曲輪 18 (図版 5)

曲輪 17 と同じく、西側を堀切 8 に東側を堀切 7 に区切られ、北と南は急峻な斜面が迫る細長い形状を

呈する。上を遊歩道が通る。本城跡で最も西側に位置する。

2) 堀 切

堀切 1 (図版 7、写真図版 13)

曲輪 1 の北側切岸直下に位置する。曲輪 1 と曲輪 4 の付け根部分に設けられ、尾根の主軸に直交する東西方向の堀切である。上幅約 4.6m の小規模な堀切である。立上りは、南は曲輪 1 の切岸で急角度であるが、北の曲輪 4 側では緩やかである。上端部からの深さは約 0.6m と浅い。3 トレンチの調査では表土から約 25cm 下で地山となる。断面形状は箱形である。

堀切 2 (図版 8、写真図版 13)

曲輪 5 と曲輪 6 を区切る堀切である。西側は曲輪 8 に収斂する。尾根の主軸に直交する東西方向の堀切である。上幅約 10.0m、底面幅約 5.8m の大きな堀切である。深さは曲輪 5 からは約 3.7m、曲輪 6 からは約 1.5m である。断面形状は箱形である。

堀切 3 (図版 8・9、写真図版 14)

曲輪 6 と曲輪 7 を区切る本城最大の堀切である。尾根の主軸に直交する東西方向の堀切である。現在、堀底は遊歩道として利用されている。堀切 2 の南、約 47m の位置にある。北側の曲輪 6 の切岸が大きく崩落が見られるなど正確な規模は不明ながら、上幅約 16.4m、底面幅約 3.8 ~ 8.2m と見られる。深さは曲輪 6 からは約 7.5m、曲輪 7 からは約 2.3m である。断面形状は箱形である。

堀切 4 (図版 9、写真図版 15)

曲輪 7 と南部を区切る尾根の主軸に直交する東西方向の堀切である。堀切 3 の南、約 41m の位置にある。現在、中央を遊歩道が通る。上幅約 5.4 ~ 6.6m、底面幅約 3.2 ~ 4.6m と見られる。深さは曲輪 7 からは約 2.0m である。断面形状は箱形である。

堀切 5 (図版 9、写真図版 15)

本城の最南端に位置する。曲輪 7 から南に延びる尾根が南東に屈折したところに設けられる。堀切 4 の南、約 50m の位置にある。現在、中央を遊歩道が通る。上幅約 6.8 ~ 8.0m、底面幅約 3.4 ~ 4.0m と見られる。深さは北西の平坦面から約 4.3m である。断面形状は箱形である。

堀切 6 (図版 7、写真図版 16)

曲輪 1 から階段状の幅狭の帯状の曲輪を下り、西に延びる尾根の付け根付近で、曲輪 17 の東側を区切る大きな堀切である。尾根の主軸に直交する概ね南北方向の堀切である。南側の一部は遊歩道により壊されている。上幅約 7.4 ~ 14.6m、底面幅約 3.8 ~ 6.2m と見られる。底面が大きく崩落しているが、深さは曲輪 17 からは約 8m である。断面形状は箱形である。

堀切 7 (図版 5、写真図版 17)

曲輪 17 の西側、曲輪 18 の東側を区切り、尾根の主軸に直交する南北方向の堀切である。堀切 6 の西、約 60m の位置にある。現在、中央を遊歩道が通る。上幅約 4.0 ~ 6.8m、底面幅約 1.6 ~ 2.4m と見られる。深さは曲輪 18 からは約 5m である。断面形状は箱形である。

堀切 8 (図版 5、写真図版 17)

本城の最西端に位置する。曲輪 18 の西側を区切り、尾根の主軸に直交する南北方向の堀切である。堀切 7 の西、約 35m の位置にある。現在、南側を遊歩道が通る。上幅約 4.2 ~ 8.0m、底面幅約 1.0m と見られる。深さは曲輪 18 からは約 3.5m である。断面形状は「V」字状の薬研堀である。

堀切 9 (図版 12、写真図版 18)

曲輪 3 から階段状の幅狭の帯状の曲輪を下り、東に延びる尾根の付け根付近で、曲輪 14 の西側を区切る尾根の主軸に直交する南北方向の堀切である。上幅約 7.2 ~ 8.4m、底面幅約 4.0 ~ 6.4m と見られる。深さは曲輪 14 からは約 1.5m である。断面形状は箱形である。

3) 通 路

通路 1 (図版 7・8、写真図版 19)

曲輪 2 の南西部から曲輪 1 ②の南東部へと接続する通路で、中央付近で北側に「S」字状に緩く折れ曲がる。折れ部は標高約 94 ~ 96m 付近の間に設けられ、斜面に平行した向きで約 8m 張り出す。

通路 2 (図版 7・8、写真図版 19)

曲輪 8 の西側切岸の斜面（角度約 30°）に設けられた溝状の通路である。長さ約 8m、幅が約 2m で中央が浅くくぼむ。

4) そ の 他

A 地点 (図版 10)

曲輪 3、曲輪 11 から北西方向に下る尾根上に展開する曲輪群である。本城の最北端にある施設である。段差を持つ 10 以上の曲輪が延長約 105m、標高差約 41m の間に設けられる。曲輪の平面形は台形状を呈するものが多い。道 A の東側に沿うように配置される。また、西側に大きな崩落が数か所で見られる。

B 地点 (図版 12・13)

曲輪 14 の北東～南東にかけて扇状に展開する斜面に設けられた帯状の曲輪群である。本城の最東端にある施設である。最大で 21 段の細長い曲輪が約 91m × 65m の範囲で標高差約 29m の間に構築されている。幅約 1.0m ~ 4.0m の帯状の曲輪群は屈曲しながら直線状に延びる形状を主とし、約 2m 前後の段差を持つ。ところどころ崩落が見られる。なお、現況は鬱蒼とした竹林である。

C 地点 (図版 7)

曲輪 1 の西侧斜面に築かれた半円状の小規模な曲輪群である。約 33m × 20m の範囲に 4 段で 4 つの曲輪が築かれる。それぞれ約 5.2 ~ 5.7m の比高差がある。

D 地点 (図版 6)

曲輪 4 の北西側斜面に築かれた半円状の曲輪群である。約 63m × 35m の範囲に 8 段に 10 以上の曲輪が築かれる。標高の高い南東は各曲輪の段差は約 1.7m 前後であるが、北西に下がるにつれ約 4 ~ 5m の段差を持つ。

E 地点 (図版 6)

曲輪 4 の北側斜面に築かれた台形状の曲輪群である。約 69m × 27m の範囲に 6 段に 6 以上の曲輪が築かれる。北側は墓地として利用され、さらに北にも類似した形状の平坦地が存在する。根子屋から曲輪 4 に通じる道が存在する。

2 確認調査

A 調査の概要

曲輪における建物などの遺構の内容と堀底の形態の確認および山城の機能した年代を示す遺物を得ることを目的に曲輪1・2・7、堀切1に任意の位置にトレーンチを設定した。大きさは2m×5mを基本とした。全体の調査面積は48m²である。なお、遺構については半截し土層を確認したにとどめた。図面はトレーンチ平面、断面図を1:40、ピット・土坑平面、断面図を1:40とした。

B 基本土層

基本土層は次の3つの層に大別できる。I層の表土は褐灰色土で、落葉とその半腐朽物の堆積層である。II層はにぶい黄褐色土、III層は明黄褐色系の土層で硬く締まる。遺構が確認されるるすれば、III層上面であると想定される。III層の土質は地点によって違いがみられた。また、地点によって表土～地山間の堆積土の厚さは異なるが、基本的に堆積土は薄い。植林された杉が多く存在しているが、それらの落葉・落枝以外の堆積要因が無いためだと考えられる。堆積土が厚い地点には近傍に切岸が存在し、崩落による堆積が想定できる。土層の土色観察は『新版 標準土色帖』(小山・竹原 1967) (2010年版) を用いて、図版にその記号を掲載した。

C トレーンチ各説

1) 1トレーンチ (図版16・写真図版6)

曲輪1に設定した。中央やや南寄りに神明社が建っているが、その正面に南北方向を長軸にして設定した。表土からは瓦や礫が多量に出土した。10cmほど掘下げる地山と思われる黄褐色土に達したが、木根の搅乱を受けていた。遺構の可能性がある黒褐色土がみられたため、半截を行った。深さ10cmであり、積極的に遺構とすることは難しい。遺物は表土から出土した瓦・礫・鉄製品・飲食容器などである。特に瓦と礫が多量に出土している。瓦は神明社がかつて瓦葺きだった可能性を示すものであろう(現在はトタン屋根)。礫は社の正面の地面に埋め込まれている石(社前)や裏手にある石祠に使用されている石材に類似し、部分的に成形された痕跡を持つものが多くみられた。越前産の筋谷石と思われる。鉄製品は鍔や釘などで、やはり社に関連するものと想定できる。飲食容器はごく最近のものであろう。城の存続年代に言及出来る遺物は出土していない。

2) 2トレーンチ (図版16・写真図版6)

曲輪1の南側で一段下がった平場の東端に東西方向を長軸にして設定した。堆積土は1トレーンチと異なり、表土と地山の間に漸位層がみられた。遺物は1トレーンチと共通する内容であった。遺構は検出できなかった。

3) 3トレーンチ (図版16・写真図版13)

堀切1の底面の断面形状を明らかにすることを目的とし、東西軸の堀切に対して直交する形でトレーンチを設定した。層序は2トレーンチと共通するが、2トレーンチに比べやや厚い堆積がみられた。曲輪1切岸からの崩落土が堆積したものと思われる。表土から約25cm下で地山と考えられる浅黄色シルトに達

した。堀切底面の断面形状は箱形である。表土からは陶磁器・瓦・礫が出土し、特に礫が多量に出土した。礫と瓦の特徴は1・2 トレンチ出土遺物に共通する。陶磁器は近現代のものである。

4) 4 トレンチ (図版 16・写真図版 11)

曲輪 7 に設定した。北端に南北を長軸に $2m \times 4m$ で設定した。表土は約 10cm の堆積がみられた。表土直下 (II 層) はにぶい黄褐色土で、そこからさらに 10cm ほど掘下げると明黄褐色土となる。土色の明暗から III 層が地山かと思われたが、II 層の土質は砂質土であった。周囲に杉林しかなく堆積要因を想定できない地形であるため、地山形成後に砂質土が堆積する可能性は低いと考えられた。遺構確認面が存在するすれば II 層だと思われる。このため、II 層上面で遺構査定を行ったが、遺構は検出できなかった。II 層は整地層である可能性も検討したが、軟弱な土質であり、裏付ける遺物も出土しなかつたため、その可能性は低いと判断した。遺物は表土から時期不明の土器片が 1 点のみ出土した。

5) 5 トレンチ (図版 16・写真図版 7)

曲輪 2 に設定した。西側に東西方向を長軸に設定した。地表面から約 20cm 下で明黄褐色土を検出し、地山と判断した。遺構は検出できなかった。漸位層である II 層がほかのトレンチに比べてやや厚く堆積しているが、西側の曲輪 1 切岸からの崩落土が想定される。曲輪 2 の現地表面には所々に地彫れがみられ、これも切岸からの崩落土が関連していると考えられる。出土遺物は陶磁器・瓦などであるが、城の年代に沿うものではなかった。

3 遺 物

A 遺 物 の 概 要 (第 11 図)

平成 24 年度の調査で、採集された遺物は約 50 点あり、時期幅は中世～近現代にわたる。しかし、中世の遺物は僅か 2 点のみで、越前焼の壺の破片と土師器の底部片である。そのほかの土器は 18 世紀以降のものである。加茂城が廃城した後の遺物ということになるが、立地の観点からすれば日常的に生活が営まれる場所ではない。ただし、曲輪 1 に神明社、曲輪 3 西側に稻荷社があるため、その参拝者が訪れた際に残された遺物である可能性がある。盃や徳利といった酒器もみられ、これらは供物に使用したものと想定出来る。また、土器以外の遺物では瓦や鉄製品（釘・鍵など）がみられる。これらは城内 2 か所の社がもともとは瓦葺きであった可能性を示唆する。また、平成 27 年度の調査では、石臼 1 点を採集した。ここでは、過去に採集された遺物についてもあわせて報告する。

B 遺 物 各 説 (図版 19・写真図版 20)

1) 土器・陶磁器

1 は平成 11 年 10 月に鳴海忠夫氏が曲輪 2 の南側の切岸斜面で採集した青花皿の口縁部破片である。口径 12cm と小振りで、端部は外反する器形である。外面には界線、唐草文が見られる。被熱の痕跡があり、発泡している [鳴海 2003]。小野分類の B1 群 VI 類 [小野 1982] に相当し、15 世紀後半～16 世紀前半頃に位置付けられる。2 は珠洲焼の壺の体部片である。「ヨウガイ」と注記されているが、正確な採集地点などは不明である。外面には 3cm あたり 9 条のタタキ目が見られる。目の粗いタタキ目から吉岡編

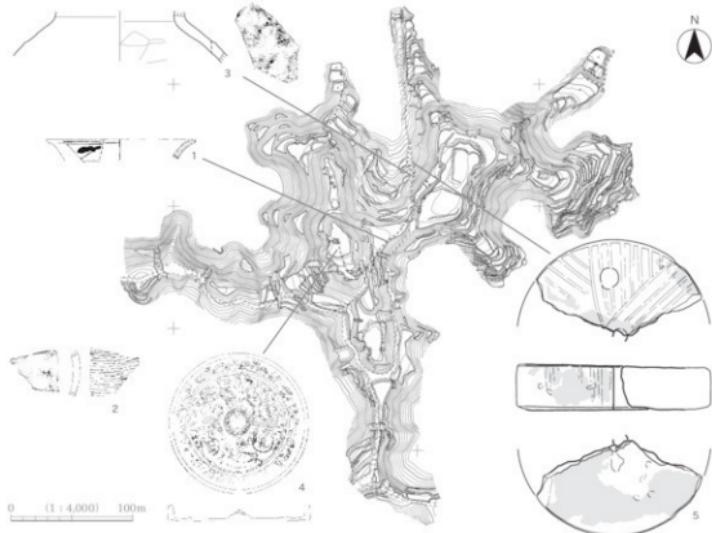
年V期〔吉岡 1994〕以降で、15世紀代のものであろう。3は越前焼の壺の頭部～体部にかけての破片である。平成24年度の調査時に曲輪3の北西下の道A沿いで採集した。外面に自然釉がかかる。16世紀代のものであろう。

2) 金 屬 製 品

4は和鏡である。昭和30年(1955)ころに吉田亀太郎氏により要害山頂付近で採集された〔横山1976〕。白銅質で鏡胎は厚く、どっしりとした重量感がある。直径11.5cm、縁高1.2cm、縁厚0.5cm、重さは299.09gである。縁は内傾し、界囲は中線単圓、紐は花蕊座紐である。鏡背面の内区・外区に洲浜から延びる松や竹が配され、内区の左下に雀が2羽向かい合う「洲浜松竹双雀鏡」である。花蕊座紐の移り変わりの特徴〔久保1999〕から14世紀前半頃に位置付けられる。

3) 石 製 品

5は粉挽き臼の下臼(雄臼)である。平成27年度の調査時に曲輪3の北西下の道A沿いで、3の採集された地点より約10m下方で採集した。直径は30.8cmと推定され、およそ3分の1に欠損している。これは菅沼氏分類の茶臼破損類型のd類にあたる〔菅沼2009〕。中央に芯棒孔があり、下面まで貫通する。挽目は6分画8溝である。副溝を壙して円形の凹みがある。また、上面、下面、断面に黒茶褐色の炭化物様の付着物が見られる。石材は花崗岩である。なお、炭化物様の付着物の年代測定を行い曆年較正年代で13世紀代の値が得られたが(第V章参照)、越後における粉挽き臼の普及は15世紀の室町期以降とされる〔坂井1998〕ことから、乖離がある。石臼そのものの年代ではなく、炭化物に由来する結果と考えたい。



第11図 加茂城跡遺物採集位置図

第V章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

加茂城跡（新潟県加茂市加茂地内）は、信濃川の支流である加茂川の左岸に分布する山地（重倉山山地）〔鈴木 1984〕北東部に築かれた戦国時代の山城であり、標高約 102m の山頂部に本丸があり、山頂より四方に伸びる尾根上には曲輪が配置される。

本報告では、加茂城跡より出土した石臼（粉挽き臼）の年代に関する資料の作成を目的として、石臼表面の付着物を対象に放射性炭素年代測定を実施した。

2 試 料

放射性炭素年代測定の対象とされた試料は、粉挽き臼の下臼（半径約 16cm、厚さ約 7.5cm）の 1/3 程度が残存する破片の表面に確認された付着物である。付着物は、摺り合わせ部や破断面の一部、下臼の底面のほぼ全体に認められ、とくに底面では膜状を呈する状況も確認される。なお、今回の測定に供された試料は、底面の一部の膜状を呈する部分より採取されており、黒色の粉状および板状（厚さ 1mm 前後）をなす炭化物様の物質である。

3 分析方法

測定試料に土壤や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸などアルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C (30 分) 850°C (2 時間) で加热する。液体窒素と液体窒素 + エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加热し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて δ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点

とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma : 68%) に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0 (Copyright 1986-2015 M. Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C 濃度の変動および半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正是、CALIB 7.1.0 のマニュアルに従い、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果は $\sigma \pm 2\sigma$ (σ は統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲) の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \pm 2\sigma$ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年較正是、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

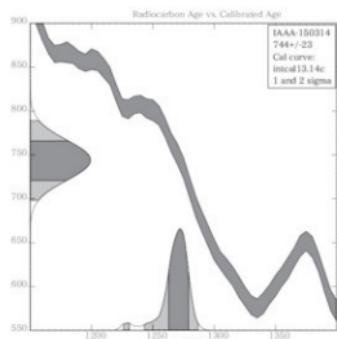
4 結 果

石臼（粉挽き臼）表面の付着物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は 740 ± 20 BP である。また、暦年較正結果 (2σ) は calAD 1226 – calAD 1287 を示す（第 12 図、第 3 表）。

5 考 察

日本国内における石臼については、日本書紀の記述などから、飛鳥時代に中国より伝來したとされている。その後、鎌倉時代には高僧や貴族などの一部の階級に広まつた茶の湯に伴つて茶臼が使用されるようになり、戦国時代には武士や商人の間にも普及したとされている。また、粉挽き臼は、鐵砲伝来以降の火薬製造に伴つて普及したとされている〔三輪 1978・2005〕。

加茂城跡から出土した粉挽き臼の付着物の暦年較正年代 (2σ) は 13 世紀代と推定されたが、加茂城跡の年代や粉挽き臼が普及したとされる時期は戦国時代とされている。これらの所見を参考すると、付着物が示した暦年較正年代は明らかに古いことから、粉挽き臼の年代ではなく、付着物由来する古い炭素の年代を反映している可能性がある。そのため、今回の測定結果については、出土状況や共伴遺物などの調査所見による、慎重な評価が望まれる。



第 12 図 暦年較正結果

試料	測定年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (BP)	暦年較正結果	相対 比	Code No.
石臼（粉挽き臼） 付着物	740 ± 20	-27.65 ± 0.35	744 ± 23	σ : cal AD 1263 – cal AD 1279 cal BP 687 – 6711.000 2σ : cal AD 1226 – cal AD 1232 cal BP 724 – 7180.017 cal AD 1244 – cal AD 1287 cal BP 706 – 6630.983	IAAA- 150314	

第 3 表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

第VI章 まとめ

1 加茂城跡の縄張りの特徴について

加茂城跡は北部の眼下に字根子屋・根古屋地域を抱え、加茂川を臨む。加茂川が東山丘陵を抜ける谷口に近く、水上交通と陸上交通の結節点を掌握できる立地環境にある。縄張りは南北約400m×東西約420mの広い範囲に展開し、中央部には最高所（標高約102m）にある曲輪1を配置し、標高約32mにある曲輪16との比高差約70mのなかに大小様々な曲輪が50以上構築されている。加茂市内はもちろん県内においても大規模な部類に入る山城である。

曲輪1を中心曲輪4～8は南北方向に一直線に配置され、要所を堀切で遮断する。特に曲輪1の南部の曲輪5～8の間は堀切2～5が約45～50mの等間隔で設けられる。曲輪1から西側へ延びる尾根も3条の堀切で通路が遮断される。曲輪1から東側には大きな曲輪2・3が設けられる。特に曲輪3は巨大で平面積が約2,000m²ある。また、曲輪3周辺には帯状の腰曲輪や尾根筋、道Aに沿って何段もの曲輪を配置するなどとりわけ強固に守られている様相から、曲輪3の重要度が推測される。同じく曲輪4から根子屋付近へ降る尾根筋にも多くの階段状に曲輪群を構築し、曲輪1への通路を固めている。

堀切は9か所で見られ、断面形が逆台形の形態をし、堀底の幅が約2m～8mとなる「箱薬研堀」〔金子2014〕となることが本城の特徴である。金子拓男氏はこの「箱薬研堀」の開闢時期の上限を天正11年（1583）としており、加茂城の存続年代を考える上で重要な施設である。

なお、大家健氏は「麓の館（本量寺境内）、山頂の要害、館を抱き込むような左右の郭群は、本庄城（村上城）の規模を小さくしたものに酷似している。本庄繁長の子頭長がつくりあげたものであろう。」〔大家1998〕とし、領主本庄頭長による影響について言及されている。また、館の位置については、郭の配置状況と大手路の推測から「館は現在の本量寺（法華宗、長寿山）の境内にあったことが最有力」〔大家1998〕としている。鳴海忠夫氏も中世城館に伴う地名などから、「山城と館の一般的なあり方からすれば、加茂南小学校の敷地もしくは本量寺境内が最もその可能性の高い地点と考えられる。」〔鳴海2003〕としている。これらの意見とは異なり、耕泰寺付近に比定する考え方もある〔西ヶ谷2015〕。本庄氏との関連や館の位置などは今後の検討課題である。

2 加茂城跡の位置付け

第1章でも記したが、本城跡については様々な名称が付与されてきた。基本的には地名の加茂と付近の小字名である要害、または通称名の要害山を組み合わせた「加茂要害城」、「加茂要害山城」と一帯が加茂山に近接または一部含まれることから「加茂山要害城」と呼ばれてきたものと推測される。市指定史跡名は「加茂山要害城砦跡」、遺跡登録名は「加茂要害城砦跡」とされていたが、平成24年以降は加茂市を代表する象徴的な山城であることに鑑みて、「加茂城跡」とすることとした。

ところで、天正8年（1580）の「上杉景勝書状」には首名綱輔に賀茂山の城を攻め落とすことを命じた記述がある。これは、加茂山の城のことと加茂城跡も含まれているものと考えられる。含まれるとは、

今回の測量調査対象範囲だけではなく、西側の尾根続きに立地し、現在の加茂山公園区域により近接した剣ヶ峰城跡と尾振山城跡とともにという意味である。ともに戦国時代の山城と見られるので、加茂城跡と一緒にとなって機能していた可能性が高い。このことは鳴海忠夫氏が加茂山の城砦群として、要害山城跡(加茂城跡)、剣ヶ峰城跡、城山砦跡と密接な関係(一つの城)にあったとしている〔鳴海 2005〕こと、藤木久志氏が加茂山の城として要害山城(加茂城跡)・剣ヶ峰城・尾振山城砦としている〔藤木 2010〕ことにも同様の考え方が読み取れる。また、大家健氏も剣ヶ峰城跡を加茂城跡の出丸群と把握されている〔大家 1998〕。西ヶ谷恭弘氏も要害山を中心とする本城(実城)として剣ヶ峰出城、尾振山出城としている〔西ヶ谷 2015〕。よって、史料に見える加茂山の城は字要害にある加茂城そばかりではなく、現状で三つの城に分かれている一帯を含んだものであった可能性が高い。

今後、剣ヶ峰城跡や尾振山城跡を含めて調査が進めば、3城の関連性が明らかになると期待される。3城が同時期に存続し、一体の山城遺構として認定されるならば、全体を俯瞰し、なお史料に見える「貢茂山」という字句も斟酌すると、今回の測量範囲も含めた全域を「加茂山城跡」、「加茂山の城跡」または象徴的な意味合いも込めた「加茂城跡」とひとくくりの名称とし、区切られたそれぞれの山城を表す場合には立地する区域の通称名を採用し、要害山城跡(現在の加茂城跡)、剣ヶ峰城跡、尾振山城跡とすることも一案であろう。

引用・参考文献

- イ 伊藤秀和 1996 『加茂市文化財調査報告(6)平成7年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 屋敷田遺跡 上大谷地内 草生津遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1998 『加茂市文化財調査報告(8)平成9年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸湯遺跡 新道遺跡 馬越遺跡 上條館跡 中沢遺跡 石川遺跡』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2010 『加茂市文化財調査報告(19)馬越遺跡Ⅲ』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2015 『加茂市文化財調査報告(26)加茂市指定史跡 高柳城跡－測量・確認調査報告書－』 加茂市教育委員会
- オ 大家 健 1998 『7. 加茂城』『図説 中世の越後』(春日山城と上杉番城) 野島出版
- 小田由美子 1999 「中世越後の石製品」『第12回 北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の石文化I』北陸中世考古学研究会
- 小田由美子・鶴巻康志・水澤幸一・伊藤啓雄 1999 「新潟県の石製品集成」『第12回 北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の石文化I』北陸中世考古学研究会
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小山正忠・竹原秀雄(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修) 1967 『新版 標準土色帖』(2010年版) 日本色研事業株式会社
- カ 金子拓男 2014 「上杉家領国の中世における箱築研堀の成立年代について」『新潟考古』第25号 新潟県考古学会
- 加茂市 1975a 旧版『加茂市史』上巻
- 加茂市 1975b 旧版『加茂市史』下巻
- 加茂市 2005 『加茂市史』資料編1 古代・中世
- 加茂市 2008 『加茂市史』資料編2 近世
- 加茂市 2015 『加茂市史』資料編3 平成26年版
- 加茂市教育委員会 2013 『加茂城跡』パンフレット
- ク 久保智康 1991 『日本の美術3 No.394 中世・近世の鏡』至文堂
- 桑原正史・金子達 2005 『加茂市史 資料編1 古代・中世』加茂市

- サ 坂井秀弥 1988 「粉挽き臼の普及期について」『頸城文化』45号 上越郷土研究会
 佐藤賢次^{あかね} 2008 「加茂市史 資料編2 近世」 加茂市
 佐藤 慎 2008 「斐太歴史の里調査報告書第6集 斐太歴史の里確認調査報告書田 鮫ヶ尾城跡 立ノ内館跡」
 妙高市教育委員会
- ス 普沼 亘 2009 「中世における茶臼の廃棄行為ー新潟県内出土資料の分析からー」『小野 昭教授退職記念シンポジウム 考古学の方法とその広がり 予稿集』 首都大学東京 都市教養学部 歴史・考古学分野 考古学研究室
- セ 関 正平 1984 「戦国の城砦 加茂要害山城」『図解 にいがた歴史散歩』<三条・燕・加茂> 新潟日報事業社出版部
 関 正平 1997 「近世加茂町の町場形成概説」『加茂郷土誌』第19号 加茂郷土調査研究会
 千田嘉博・小島道裕・前川 要 1993 『城館調査ハンドブック』 株式会社新人物往来社
- ナ 中野政樹^{ヒロシ} 1969 「日本の美術10・11 No.42 和鏡」 至文堂
 鳴海忠夫 1994 「加茂市上条城跡についてー要害の網張りを中心としてー」『加茂郷土誌』第17号 加茂郷土調査研究会
 鳴海忠夫 1999 「根小屋地名考ー根小屋地名の分布状況とその性格ー」『越佐の地名』第14号 越後・佐渡地名を語る会
 鳴海忠夫 2003 「加茂要害山城跡採集の付属について」『加茂郷土誌』第25号 加茂郷土調査研究会
 鳴海忠夫 2005 「ロマンを秘めた中世の古城」『かも 市史だより』No.12 加茂市
 鳴海忠夫 2011 「加茂城跡について」『加茂市史調査資料』
- ニ 新潟県教育委員会 1987 「新潟県中世城館跡等分布調査報告書」
 西ヶ谷恭弘 2015 「北越の小京都加茂に残る戦国時代の山城 加茂山城」パンフレット 加茂商工会議所
- ハ 長谷川昭一 2009 「上杉景勝時代の加茂城」『広報 かも』No.635 加茂市
- ヒ 広瀬都義 1974 「和鏡の研究」 角川書店
- フ 藤木久志 2009 「城と隕石の戦国誌」 朝日新聞出版
 藤木久志 2010 「戦国加茂の殿様と神様」『かも 市史だより』No.21 加茂市
 古川信三 1980 「加茂城」『日本城郭大系』第7巻 株式会社新人物往来社
 古川信三^{ひつか} 1975 「第6編 第2章 中世の痕跡」旧版『加茂市史』下巻 加茂市
 文化庁文化財部記念物課 2013 「発掘調査のてびきー各種遺跡調査編ー」
- ミ 三輪茂雄 1978 「ものと人間の文化史 25 白」 財團法人 法政大学出版局
 三輪茂雄 1994 「増補 石臼の謎」 クオリ
- ヤ 八百枝 茂 1975 「第2編 考古」旧版『加茂市史』上巻 加茂市
- ヨ 横山旭三郎 1976 「加茂の風土記 民俗資料館展示品Ⅷ」『加茂市政だより』第233号 加茂市
 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

第V章 自然科学分析 参考文献

- 鈴木都夫 1984 「I 地形分類図 新潟県中越地域 土地分類基本調査 加茂」 新潟県農地部農村総合整備課 P.10-26.
- 三輪茂雄 1978 「ものと人間の文化史 25 白」 財團法人法政大学出版局 P.392.
- 三輪茂雄 2005 「ものと人間の文化史 125 粉」 財團法人法政大学出版局 P.288.

表 1 加茂町主要農作物產量

別表 2 加茂城跡 土器・陶磁器觀察表

凡 例

1. 瓷器等 重 / 高で重が割合を示した。
2. 评估物 陶器の形状に含まれる部位等について記した。〔石〕は石質、〔瓦〕は瓦質、〔砂〕は砂質を表す。
3. 塗装 漆器の外側の被塗部で「漆地」、「4目」に分類した。
4. 色調 「漆器標準七色」(小山・竹原)1907。(2010年版)の記りを記す。

品名 No.	形状 No.	寸寸位置 No.	柄形	底面	法面 (cm)	側面 底面 合物	前ヒ	後ヒ	側ヒ	色調		手法・文様 (内面)	参考
										外面	内面		
19. 1	直曲2 直曲2 直曲2	直下位置 直下位置 直下位置	丸瓦 丸瓦 丸瓦	直 直 直	12.0 12.0 12.0	3.96 3.96 3.96	2.60 2.60 2.60	7.1 7.1 7.1	4.7 4.7 4.7	明ガリ-7灰 2.5G06/1 575/1	アリ-7灰 2.5G06/1 灰	刷毛 煎毛文	燒造2003、輪廓圓 「ヨウガガ」と記
19. 2	直曲2	直下位置	直	直								平行タテキ、ロゴリナデ	当て目
19. 3	直直A	直下位置	直	直								ロクロナデ	当て目、ロクロナデ 外面部輪廓

別表 3 加茂城跡 金属製品觀察表

凡 例

1. 金物については「日本の大業10-11 No.42 和鏡」(平安1000)を参考にした。

品名 No.	形状 No.	寸寸位置 No.	柄形	底面	法面 (cm)	側面 底面 合物	鏡面 鏡底 鏡身	鍔	鉤	側面	別圖	備考	
19. 4	直鍔1	斜面1	斜面1	斜面1	11.6	1.2	0.5	279.09	7464-A	7464-B	左面部鋸歯 右面部鋸歯	和銅30年頃(?)	

別表 4 加茂城跡 石製品觀察表

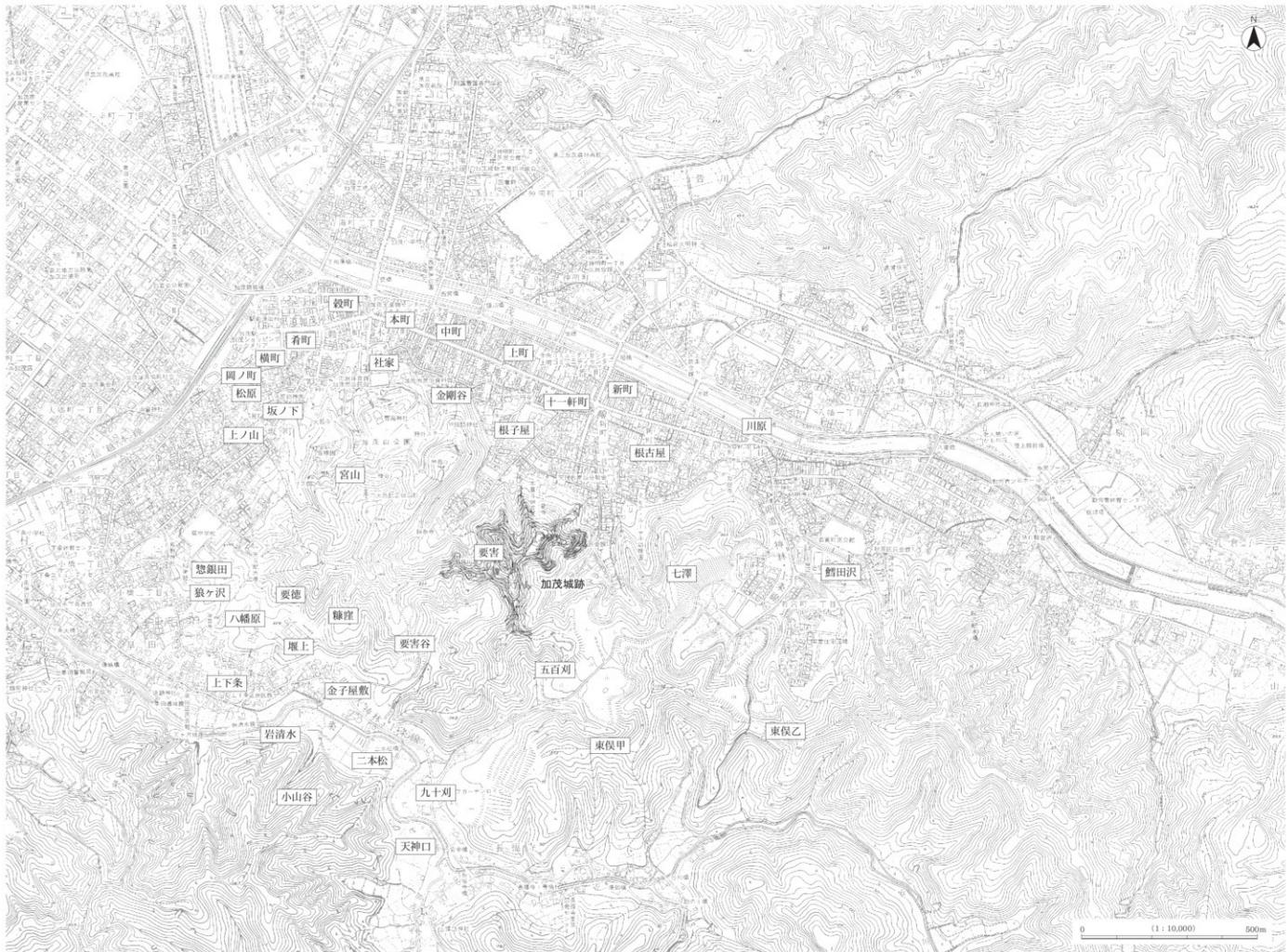
凡 例

1. 评估、(1)の項目については「ものと人間の文化史 25 日」(昭和1978)を参考にした。

品名 No.	形状 No.	寸寸位置 No.	柄形	底面	法面 (cm)	側面 底面 合物	ハバーン	側面 底面 合物	鍔	鉤	側面	別圖	備考
19. 6	直直A	直下位置	直	直	30.8	27.2	7.7	6分角頭	丸5.~20	4~7	3.863.2	花園宮	足底物種付有物

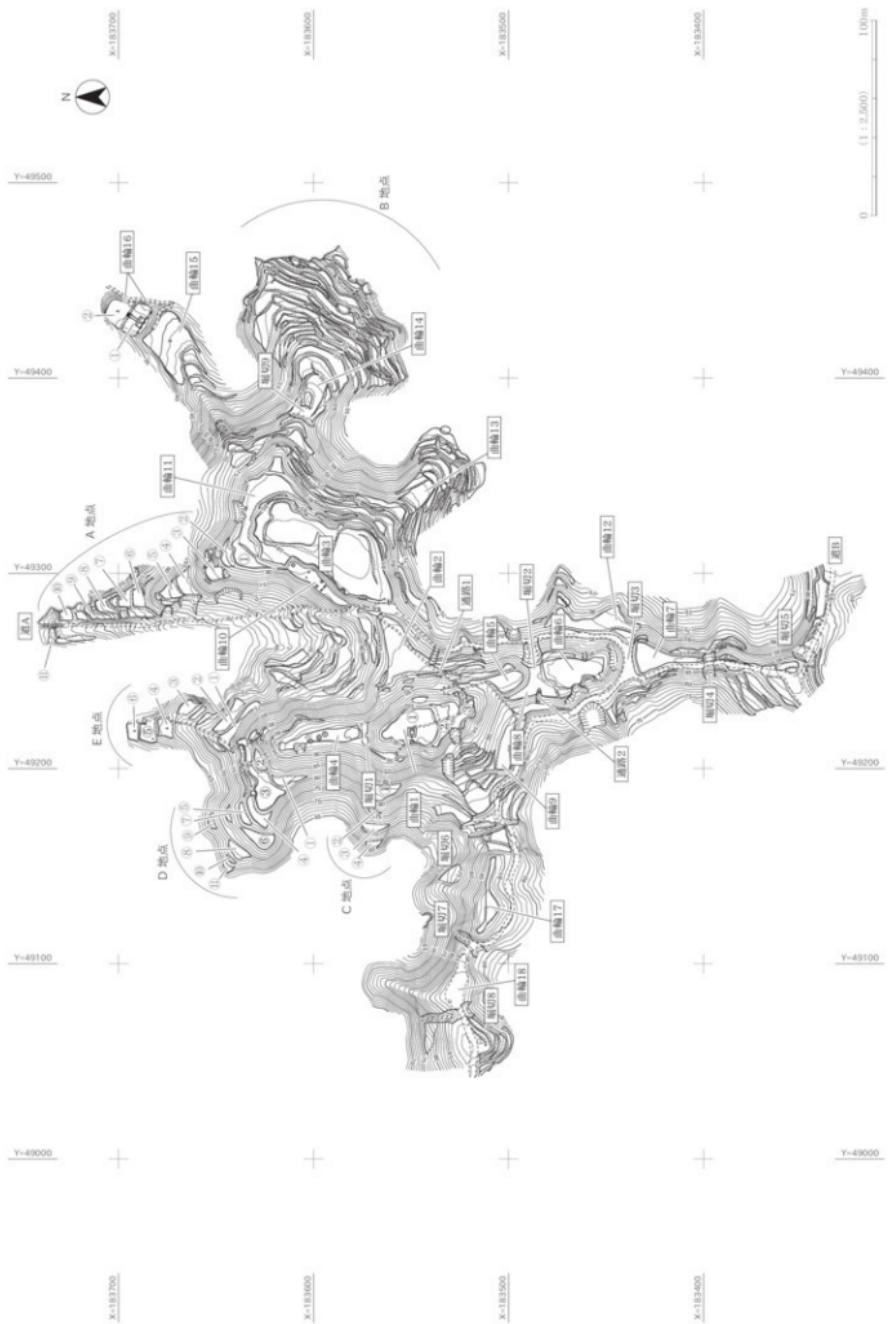
図 版

加茂城跡位置図 (S = 1 : 10,000) (加茂市 平成 20 年印刷〔加茂市街図〕 S = 1 : 10,000 原図) ※ □は周辺の主な小字名



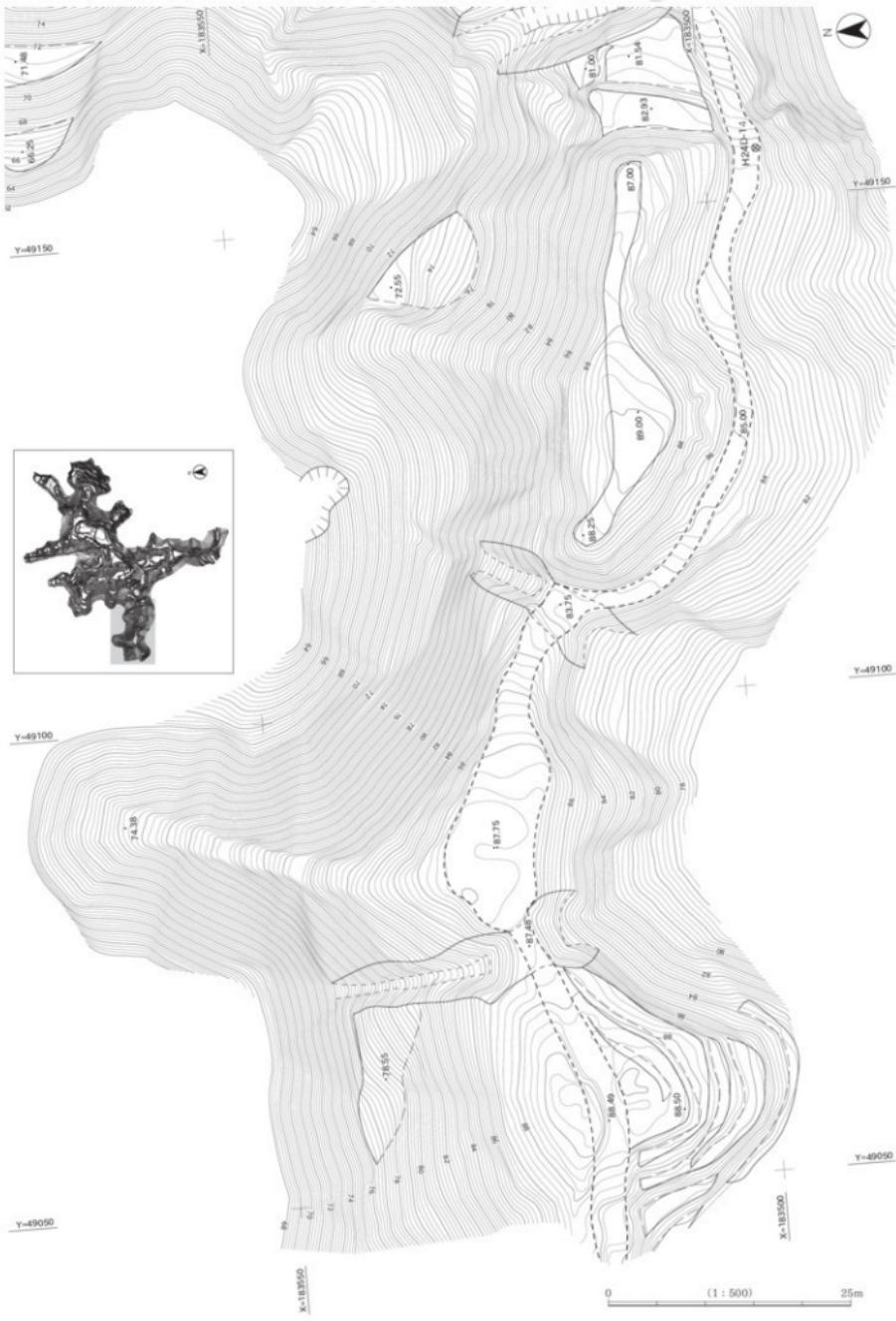




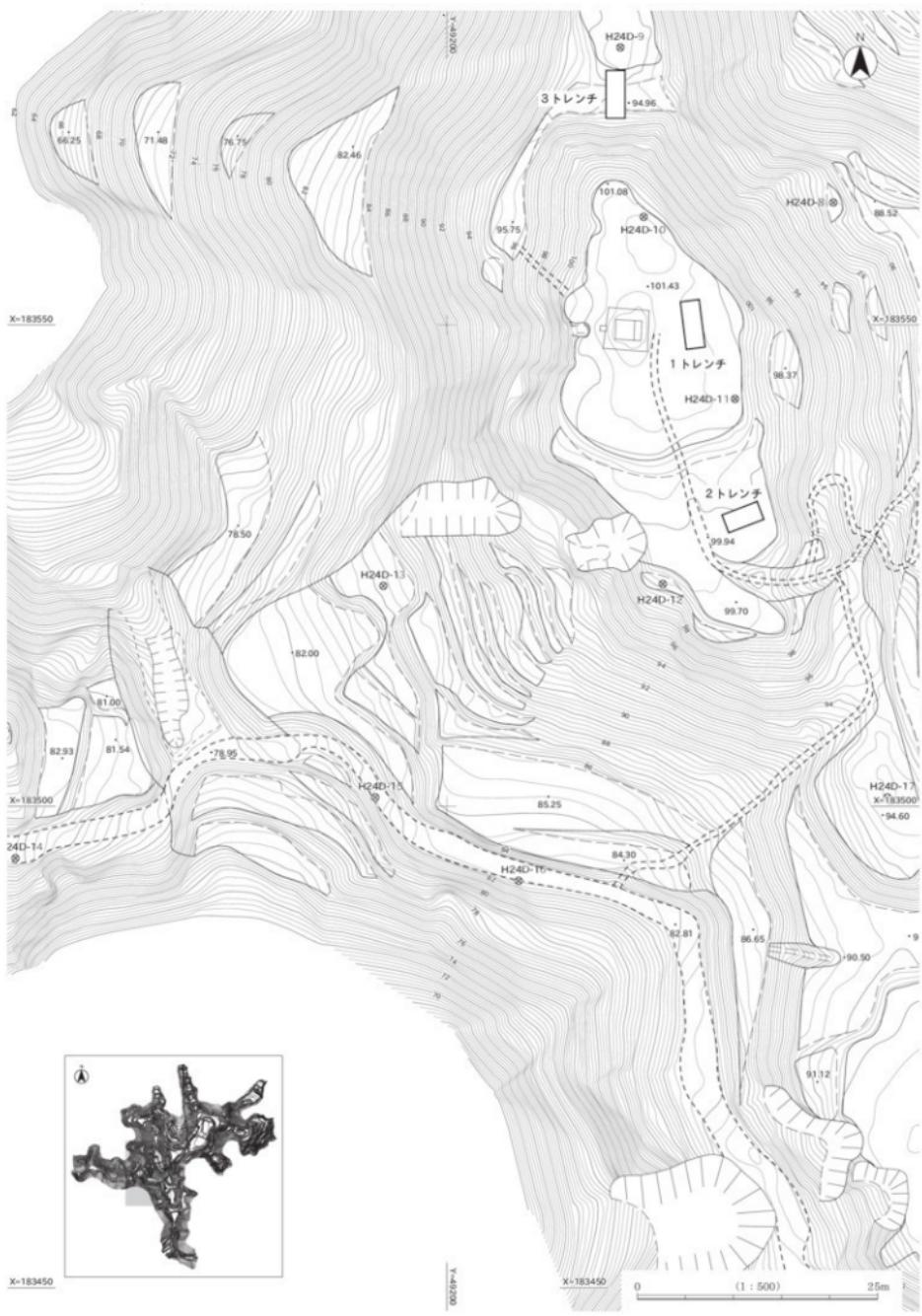


図版 5

加茂城跡地形測量個別図 (1) (S = 1 : 500)

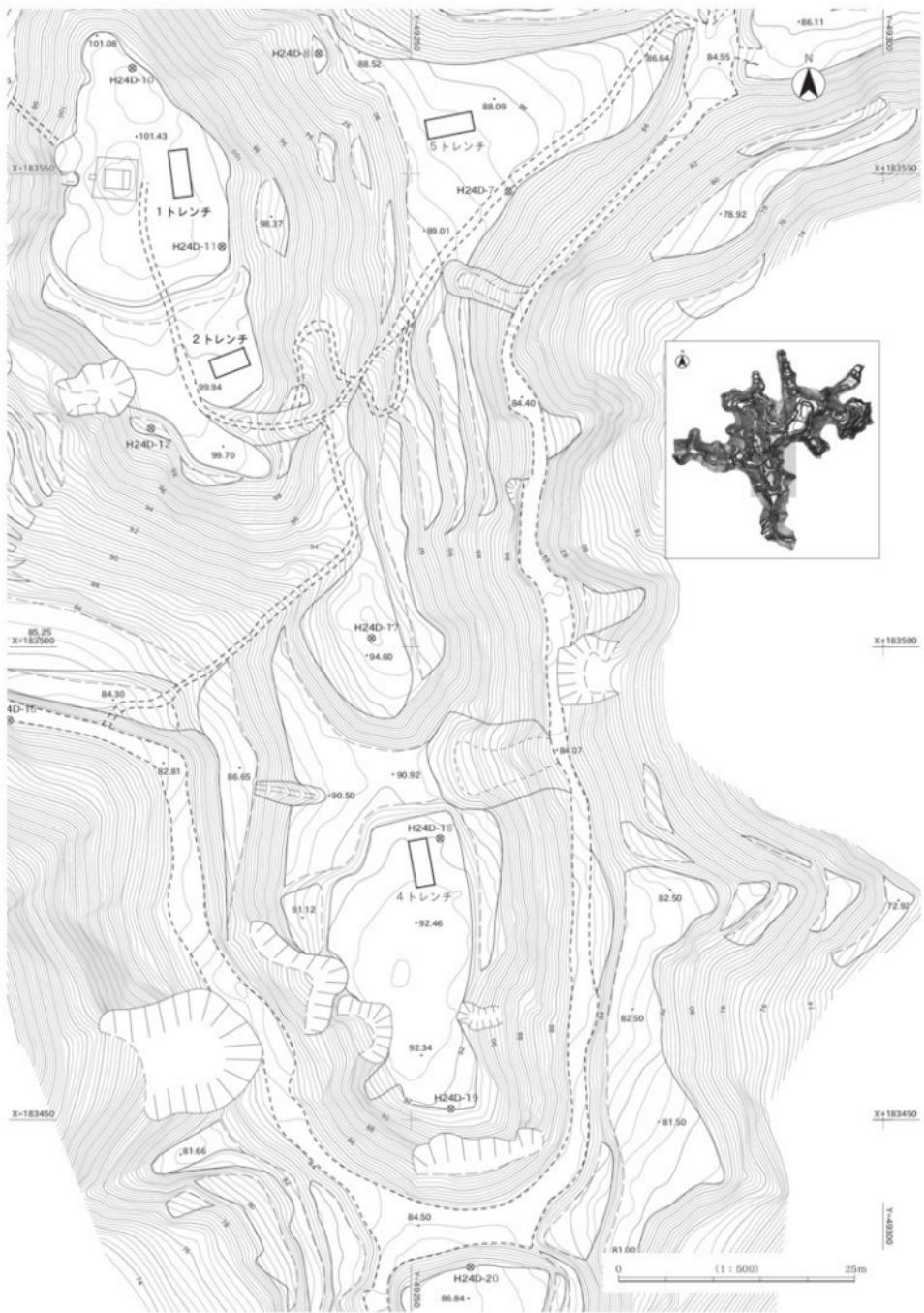




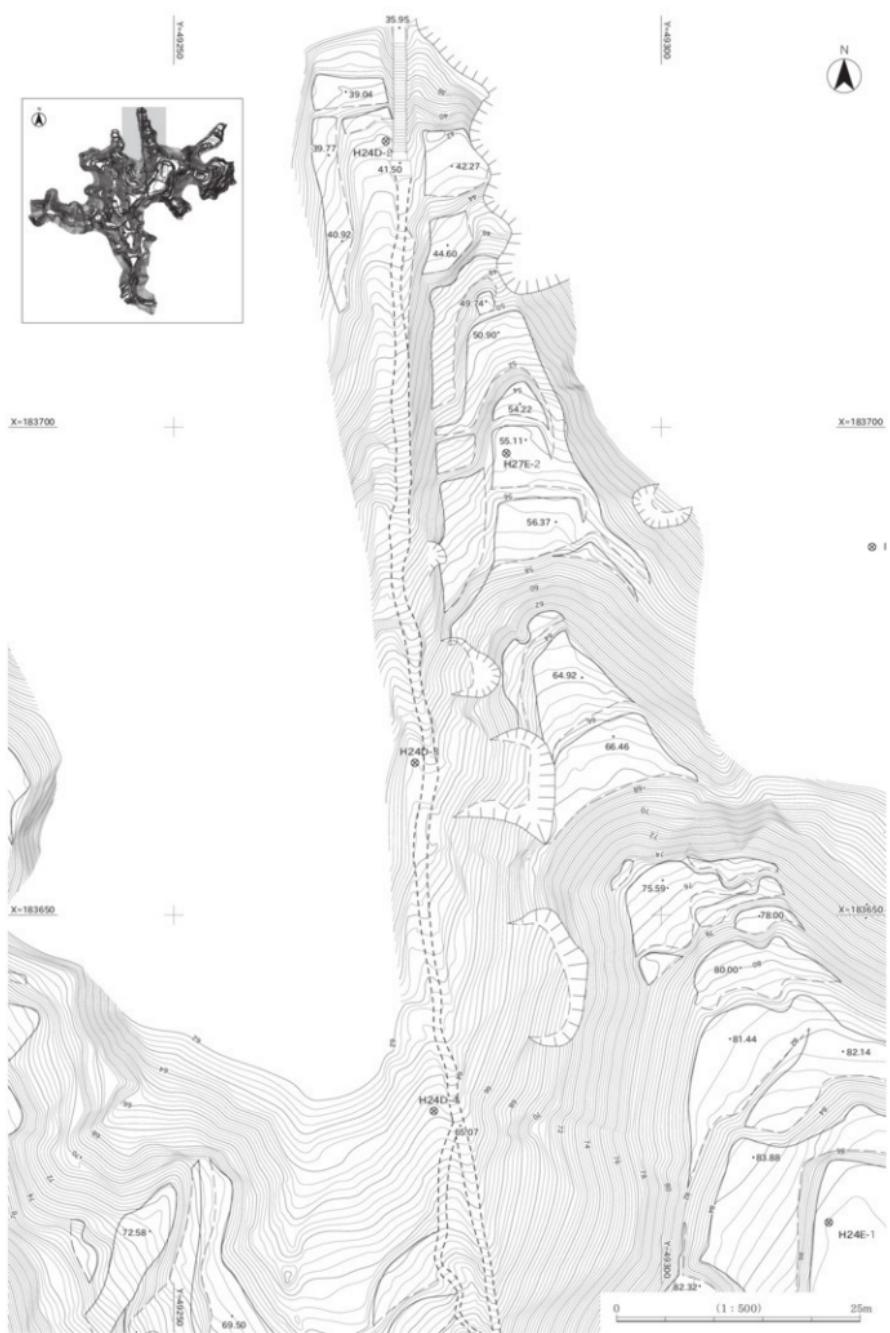


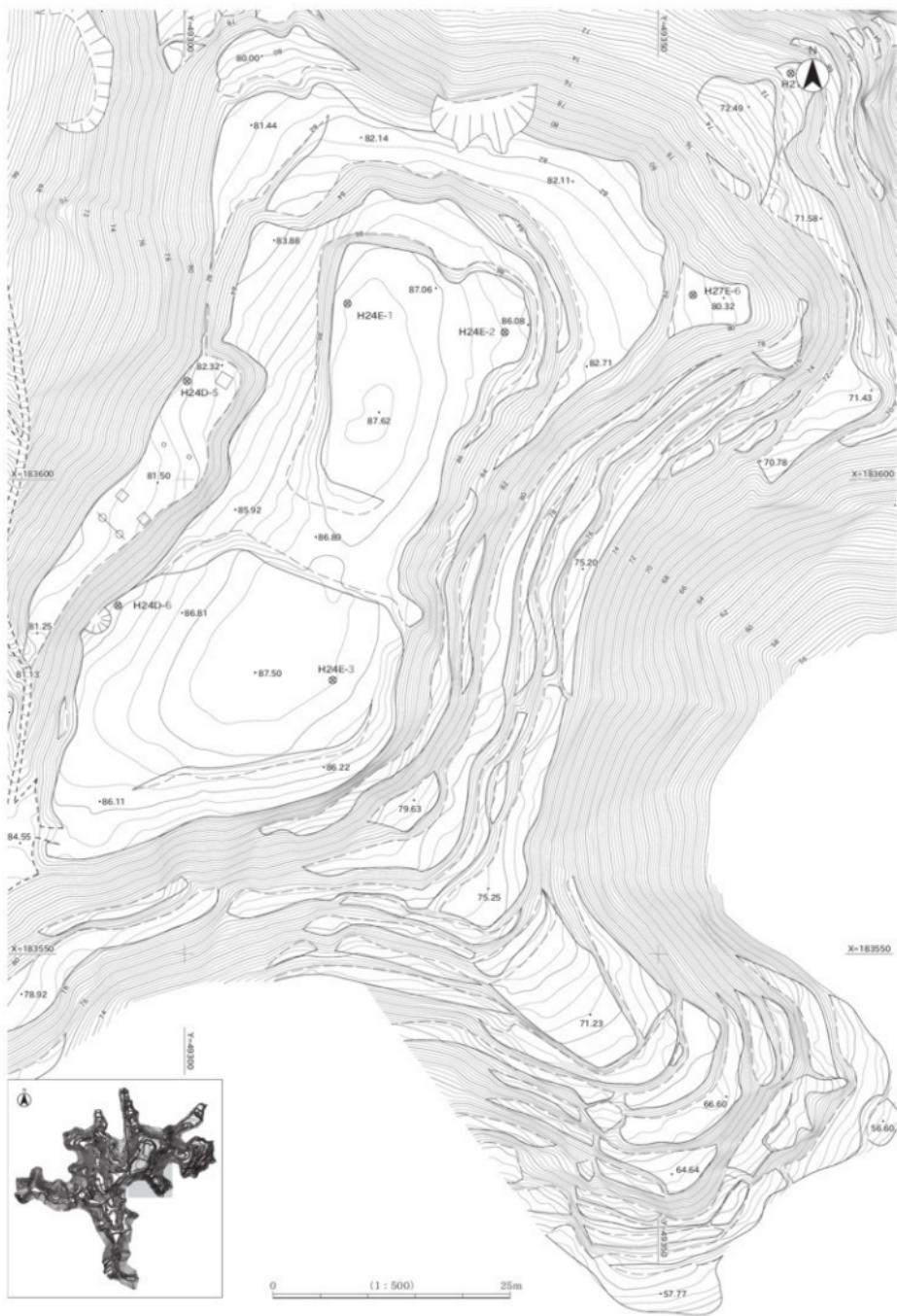
加茂城跡地形測量個別図 (4) (S = 1 : 500)

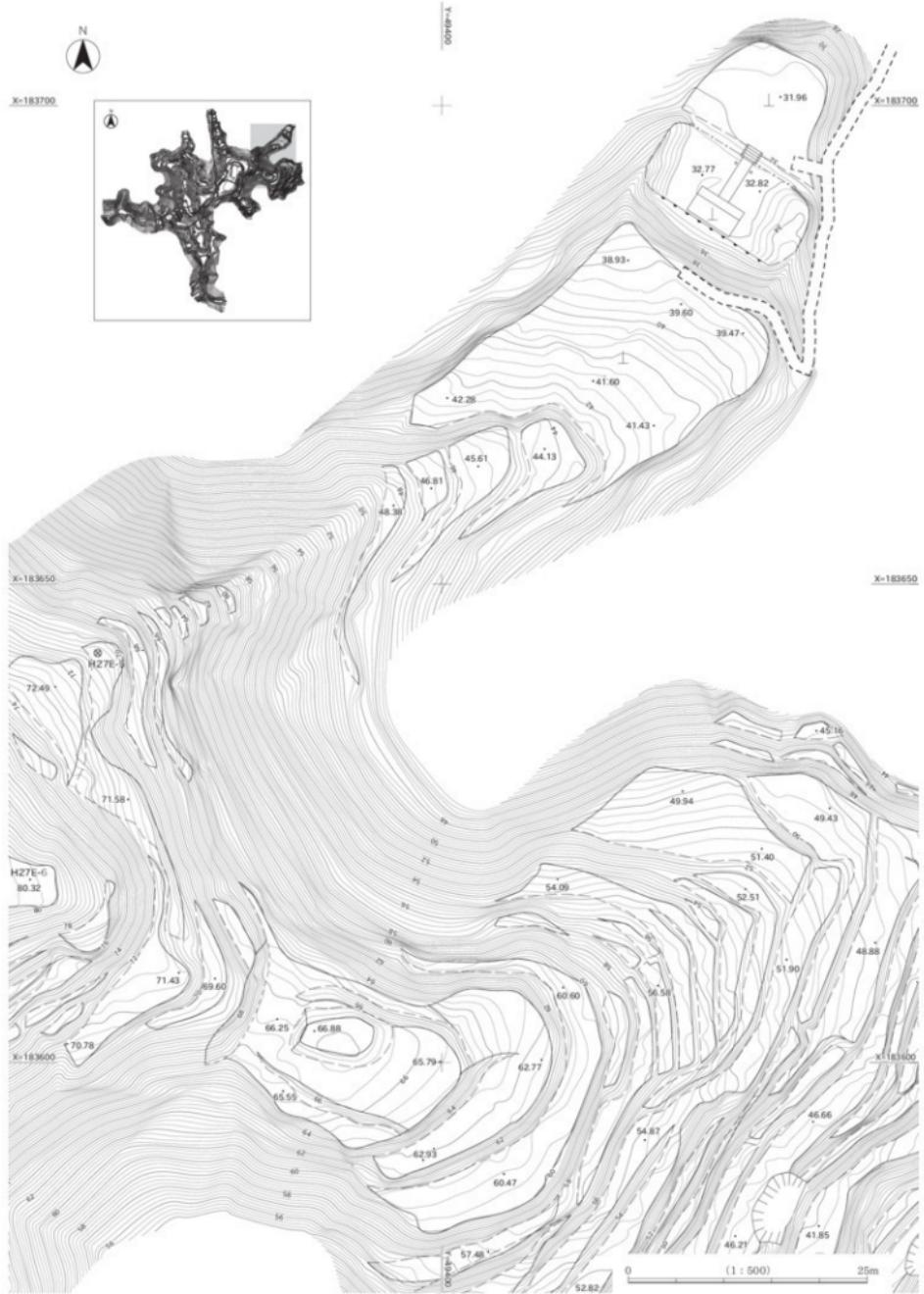
圖版 8

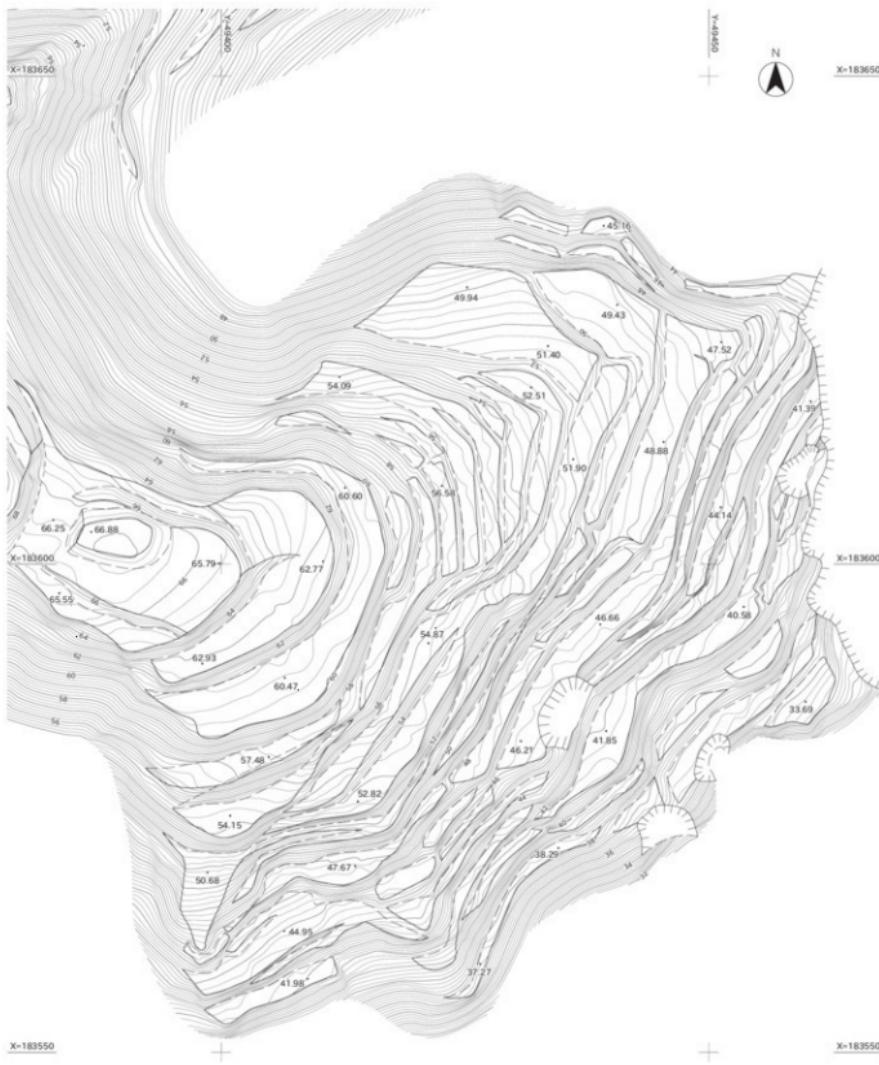












Y-183650

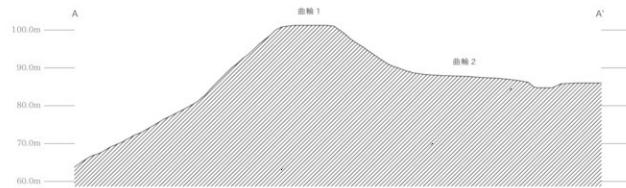
Y-183600

Y-183550

Y-1

加茂城跡断面図(1) (S = 1:500 - 1:1,000)

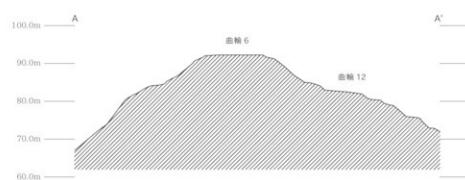
①エレベーション



⑤エレベーション



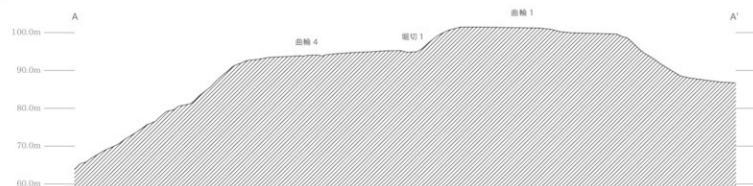
②エレベーション



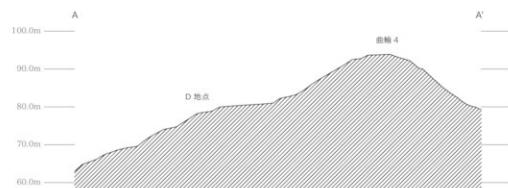
⑥エレベーション



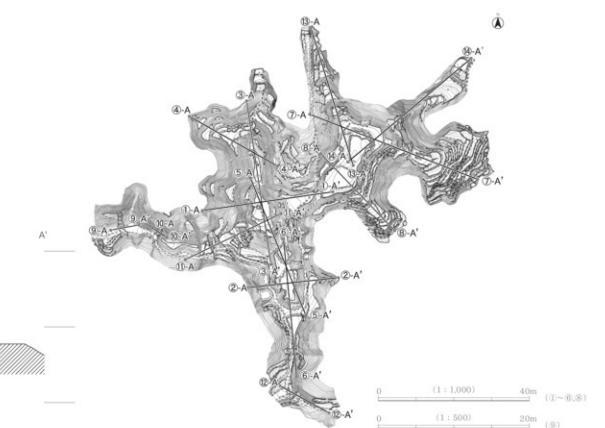
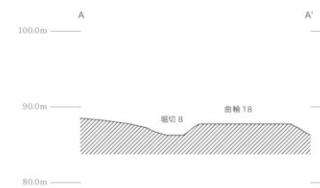
③エレベーション



④エレベーション

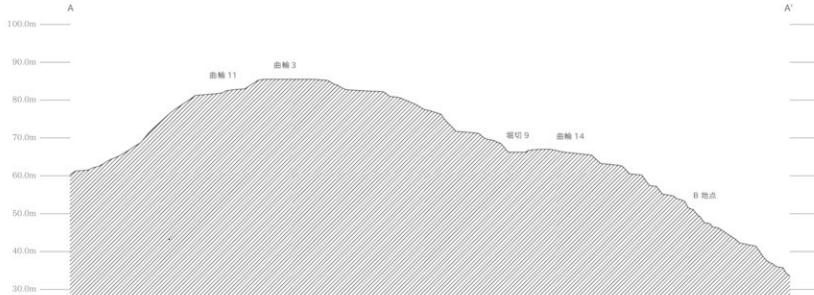


⑨エレベーション



加茂城跡断面図(2) (S=1:500・1:1,000)

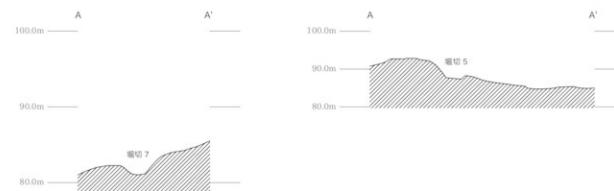
⑦エレベーション



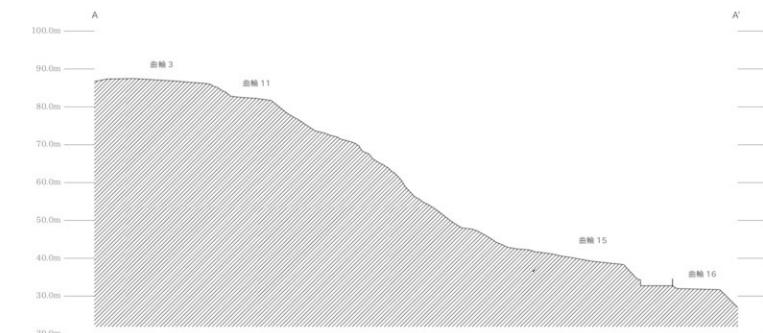
⑪エレベーション



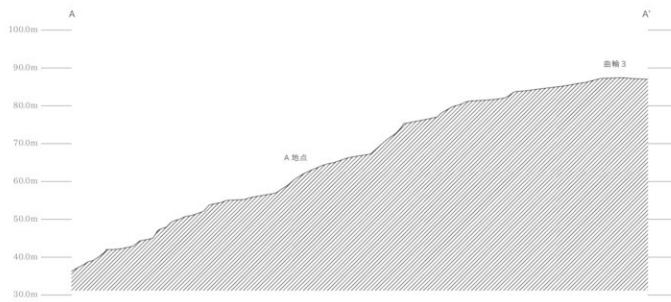
⑧エレベーション



⑨エレベーション



⑩エレベーション

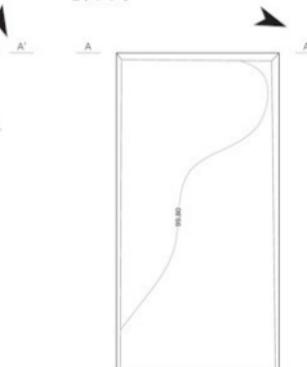


0 (1:1,000) 40m (7,B~8B)
0 (1:500) 20m (8B)

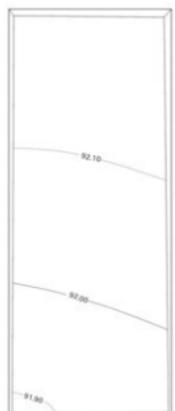
1トレント



2トレント



4トレント



1トレント



I. 10YH64/1 黒褐色土(表土)、蘿葉・藻枝とその半壊物
II. 10YR5/3 にぶい黄褐色土(堆積層)
III. 10YR7/6 明黃褐色シルト(地山)

1号ビット



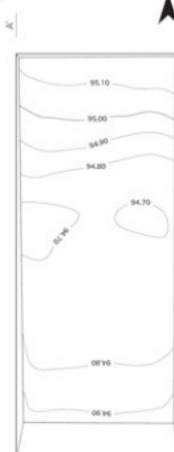
I. 10YH3/1 黑褐色土、地山土(黄褐色土)多く含む
粘性あり。しまり弱い。

4トレント



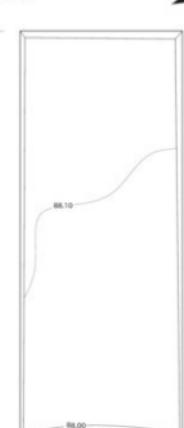
I. 10YH3/1 黑褐色土(表土)、蘿葉・藻枝とその半壊物
II. 10YR5/3 にぶい黄褐色土(堆積層)
III. 10YR7/6 明黃褐色シルト(地山)

3トレント

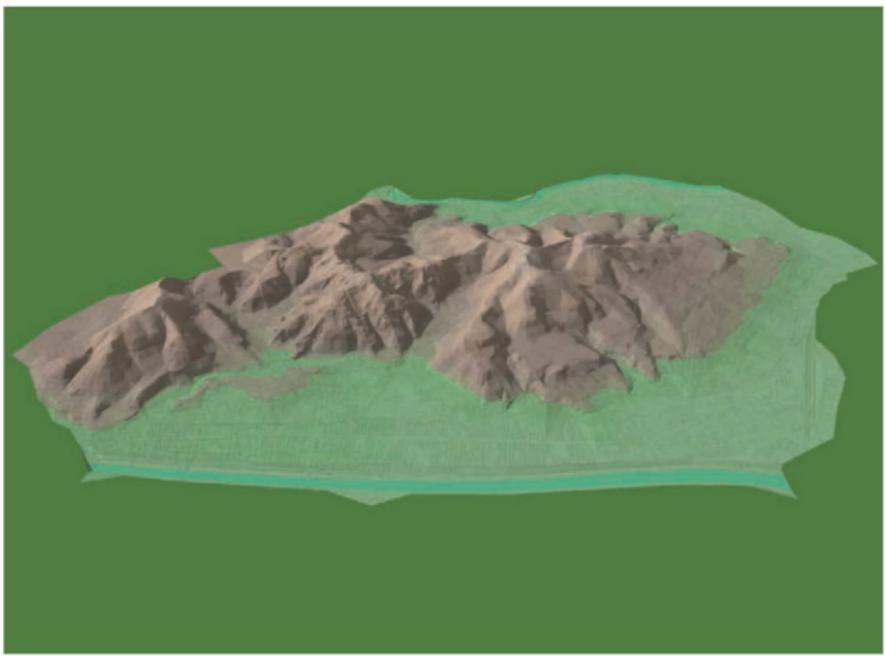
3トレント
95.70m

I. 10YH3/1 黑褐色土(表土)、蘿葉・藻枝とその半壊物
II. 10YR5/3 にぶい黄褐色土
III. 10YR7/6 明黃褐色土(地山)

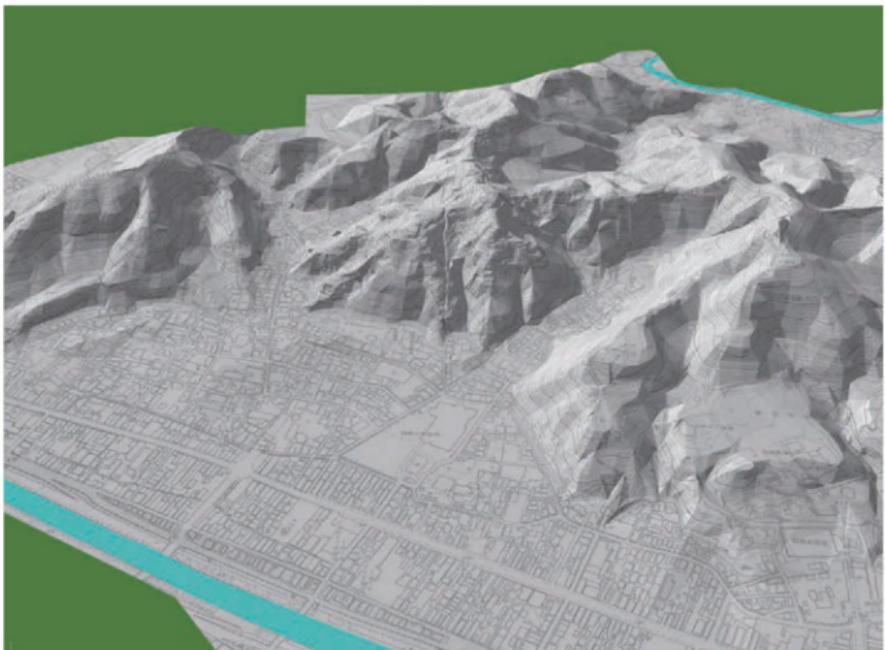
5トレント

5トレント
88.00m

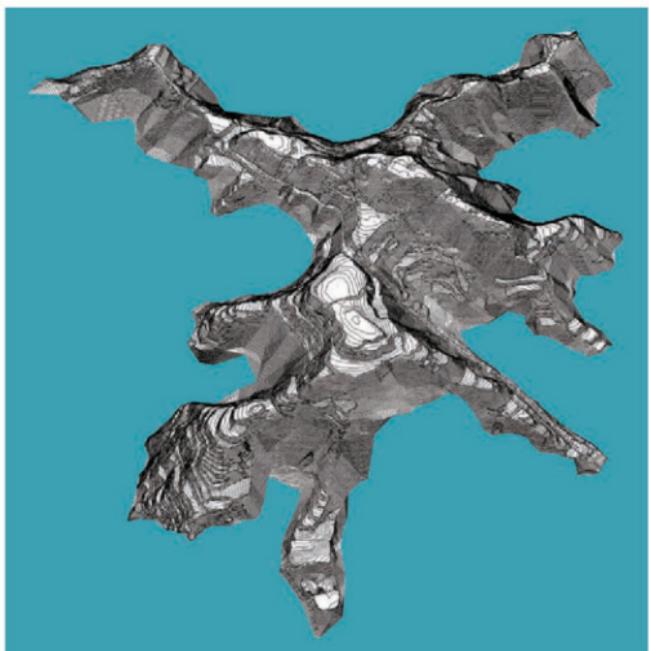
I. 10YH3/1 黑褐色土(表土)、蘿葉・藻枝とその半壊物
II. 10YR5/3 にぶい黄褐色土
III. 10YR7/6 明黃褐色土(地山)



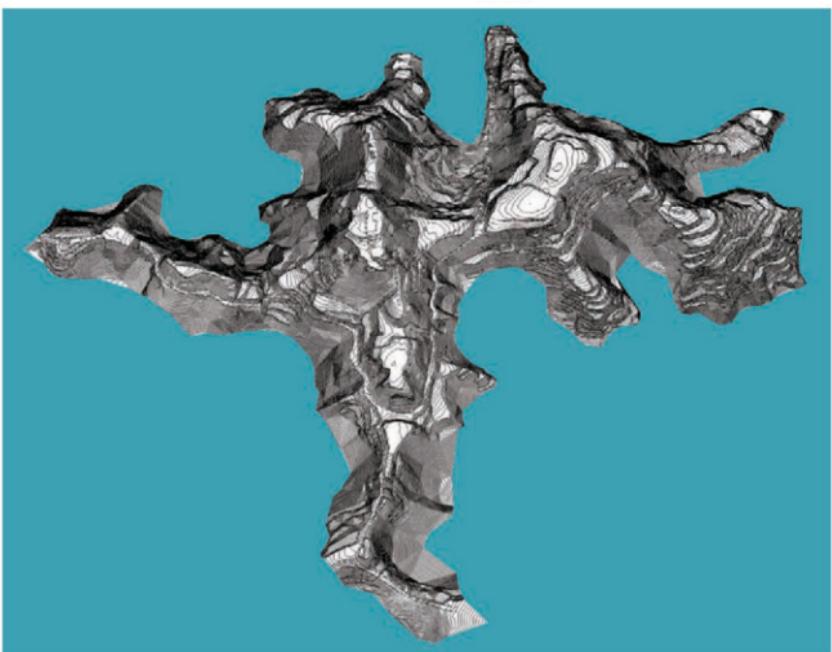
北東から



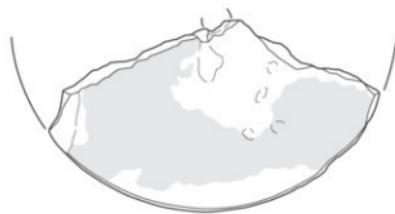
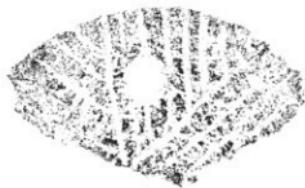
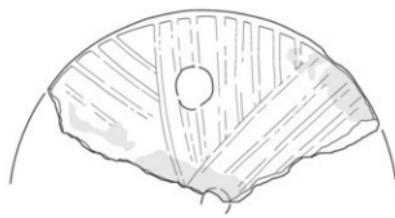
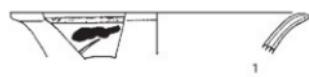
北から



北東から



南から



0	1・4 (1:2)	10cm
0	2・3 (1:3)	15cm
0	5 (1:4)	20cm

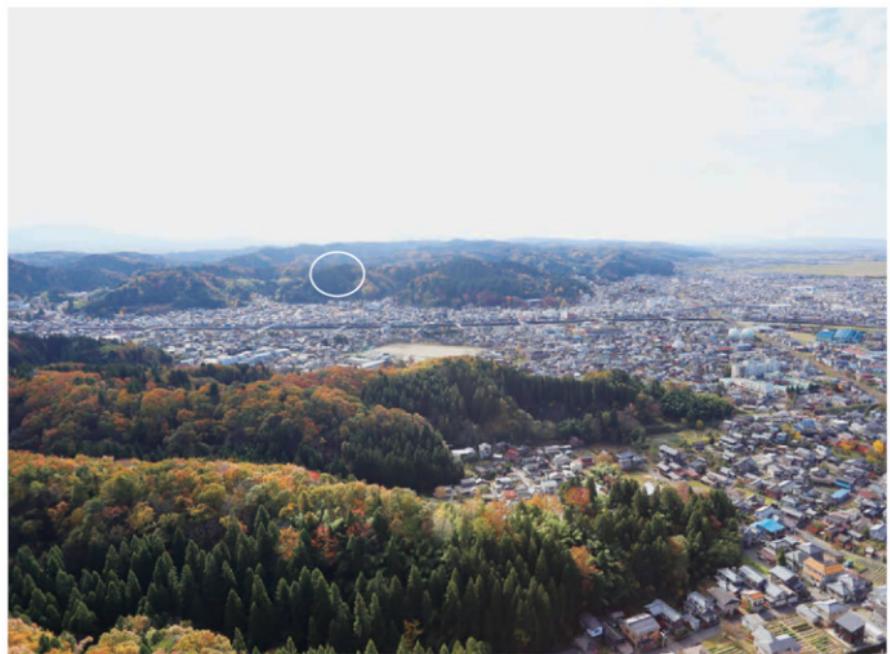
写 真 図 版



加茂城跡周辺空中写真（北西から）



加茂城跡周辺空中写真（上が北）



加茂城跡周辺空中写真（北から）



加茂城跡周辺空中写真（北から）



加茂城跡周辺空中写真（南から）



加茂城跡遠景（北から）



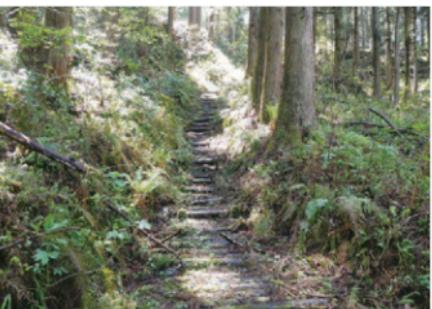
加茂城跡に登る道 A ①（北から）



加茂城跡に登る道 A ②（北から）



加茂城跡に登る道 A ③（北から）



加茂城跡に登る道 A ④（北から）



加茂城跡に登る道 B ①（南東から）



加茂城跡に登る道 B ②（南から）



加茂城跡に登る道 B ③（東から）



加茂城跡に登る道 B ④（北東から）



草刈作業風景（H24 年度）



草刈作業風景（H24 年度）



地形測量作業風景（H24 年度）



地形測量作業風景（H27 年度）



地形測量作業風景（H27 年度）



トレンチ調査風景（H24 年度）



典文化行政課 深沢氏、鳴海氏、高橋氏現地指導



調査スタッフ（曲輪 1 にて）



曲輪 1 近景（南東から）



曲輪 1 近景（北から）



曲輪 1 切岸近景（北から）



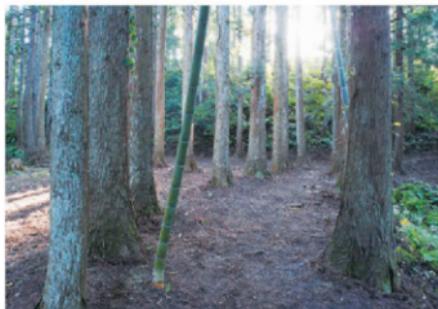
曲輪 1 1 トレンチ発掘（南から）



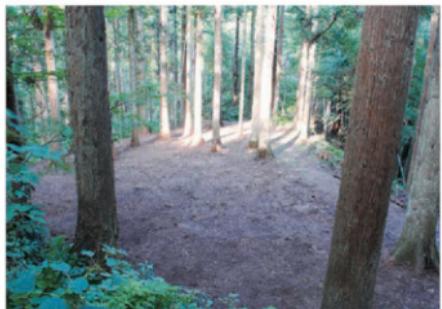
曲輪 1 2 トレンチ発掘（南西から）



曲輪 2 近景（南から）



曲輪 2 近景（北から）



曲輪 2 近景（南西から）



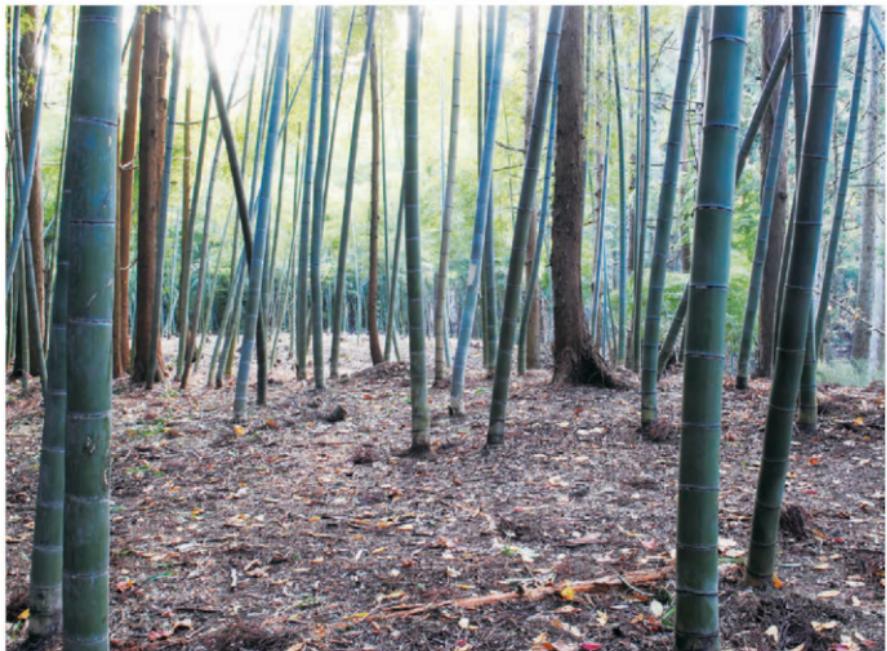
曲輪 2 近景（北西から）



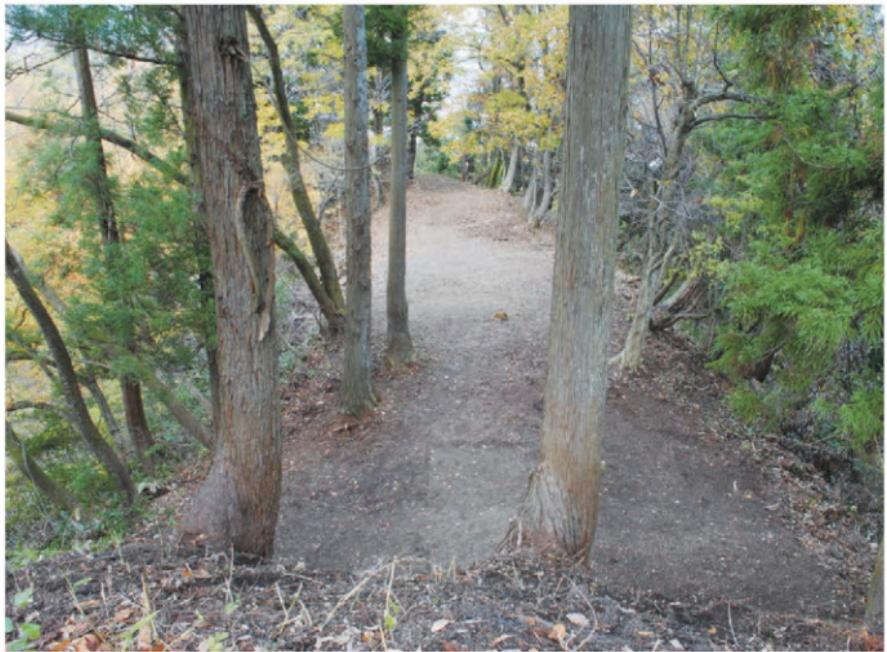
曲輪 2 5 トレンチ完掘（北東から）



曲輪 3 近景（南西から）



曲輪 3 近景（北から）



曲輪 4 近景（南から）



曲輪 4 からの眺望（北方向）



曲輪 5 近景（南東から）



曲輪 5 近景（北西から）



曲輪 6 近景（北から）



曲輪 6 近景（北西から）



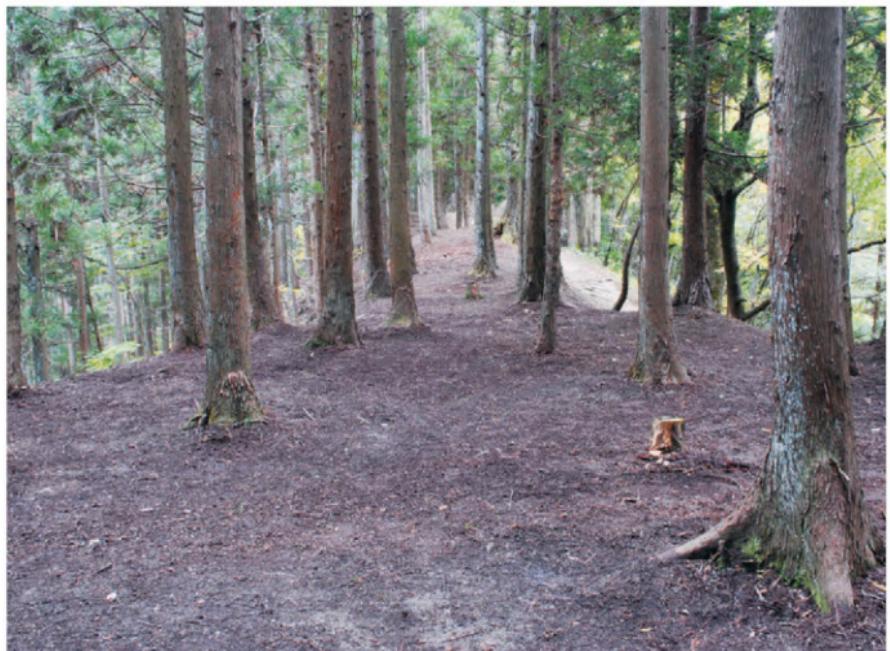
曲輪 6・4 トレンチ北壁（南から）



曲輪 6・4 トレンチ完掘（南から）



曲輪 7 近景（南から）



曲輪 7 近景（北から）



曲輪 8 近景（南から）



堀切 1 (東から)



堀切 1・3 トレンチ西壁 (東から)



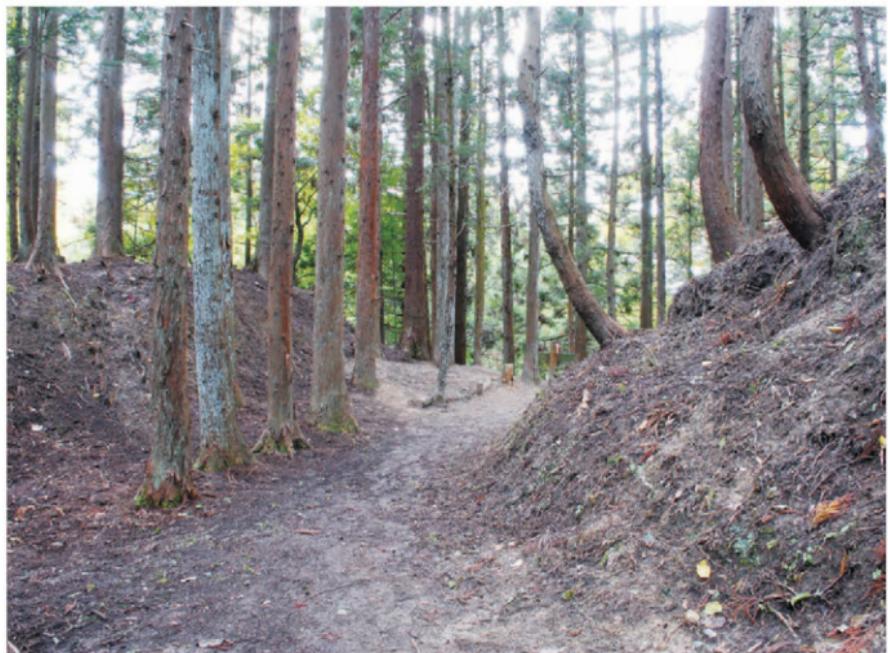
堀切 1・3 トレンチ完掘 (北から)



堀切 2 (南東から)



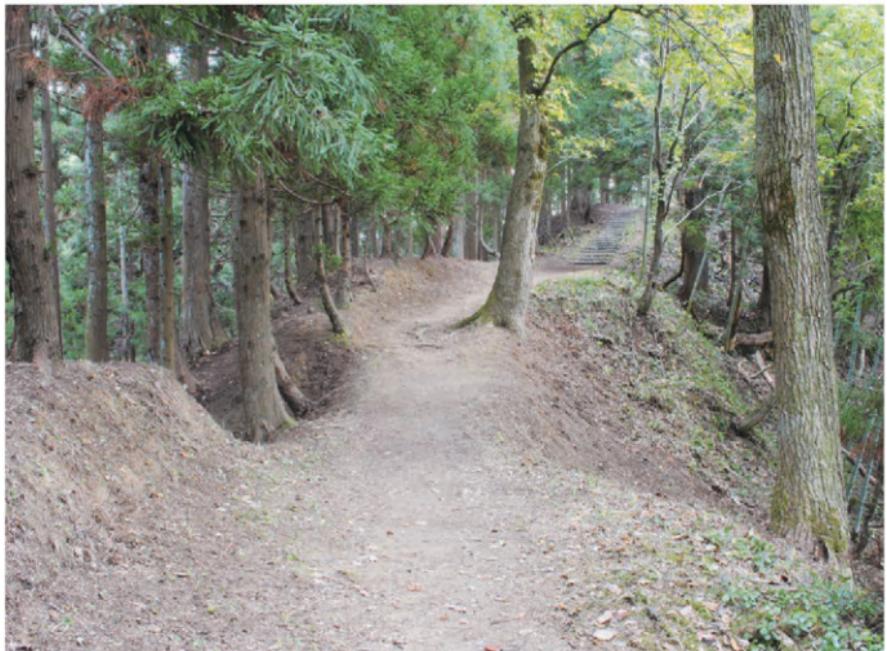
堀切 2 (南西から)



堀切 3（北から）



堀切 3（東から）



堀切 4（北から）



堀切 5（西から）



堀切 6（北西から）



堀切 6（南西から）



堀切 7（西から）



堀切 8（南から）



堀切 9（北東から）



堀切 9（南から）



通路 1（北から）



通路 2（北東から）



鏡部分アップ



双雀部分アップ



5

1 (1 : 1)
2~4 (1 : 2)
5 (1 : 4)

報告書抄録

ふりがな	かもじょうあと							
書名	加茂市指定史跡 加茂城跡							
副書名	測量・確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告 (28)							
編著者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会 社会教育課							
所在地	〒 959-1392 新潟県加茂市幸町 2 丁目 3 番 5 号 TEL (0256) 52-0080							
発行年月日	西暦 2016 年 6 月 30 日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
加茂城跡	加茂市大字加茂 字要害 138-子 ほか	15209	32	37 度 39 分 10 秒	139 度 03 分 28 秒	20120904~20121221 20150422~20150501	48	保存目的 の測量、 確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
加茂城跡	山城跡	中世	曲輪・堀切・ 通路	青花・珠洲焼・越前焼・ 和鏡・石臼				
要約	加茂城跡は加茂川左岸で標高約 102m の丘陵頂部に位置する戦国時代の山城跡である。眼前に加茂川を望み、水陸交通の要衝を押された立地環境にある。山城のほとんどは大字加茂字要害にある。周辺には根子屋、根古屋などの字名が残る。網張りは南北方向約 400m × 東西方向約 420m の範囲で確認される市内屈指の大規模な城郭である。主な遺構は大小さまざまな曲輪 50 以上、箱堀主体の堀切 9、通路 2 などである。中世陶器、輸入陶磁器、和鏡、石臼などが表面採集されている。							

加茂市文化財調査報告 (28)
加茂市指定史跡 加 茂 城 跡
測量・確認調査報告書
印刷年月日 平成 28 年 6 月 24 日
発行年月日 平成 28 年 6 月 30 日
発行・編集者 加茂市教育委員会
〒 959-1392 新潟県加茂市幸町 2 丁目 3 番 5 号
TEL 0256 (52) 0080
印 刷 所 株式会社 小野塚印刷所
〒 959-1354 新潟県加茂市新町 1 丁目 5 番 16 号
TEL 0256 (52) 0056

付図 加茂城跡 現況地形測量図 (S = 1 : 1,000)

